

顔



トランスカルチャー

トランスカルチャー状況下における
顔・身体学の構築（第3回）

床呂郁哉 編

身体

科学研究費助成事業

「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築—多文化をつなぐ顔と身体表現』

2018年度 公開シンポジウム（2018年11月25日）

科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築―多文化をつなぐ顔と身体表現』

二〇一八年度 公開シンポジウム

床呂郁哉編

トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（第三回）

日 時：二〇一八年十一月二十五日（日） 十四：〇〇～一八：三〇

場 所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）

三階大会議室（三〇三号室）

科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築―多文化をつなぐ顔と身体表現』
二〇一八年度 公開シンポジウム

I 趣旨説明

床呂 郁哉（A A 研）

1

II ご挨拶

山口 真美（中央大学）

5

III 第一部 顔・身体研究の諸相

『「かぶき」思想の身体表象としてのイレズミ』

大貫 菜穂（京都造形芸術大学）

13

「異国人をどのように描いたのか―絵画からの美術解剖学的考察」

宮永 美知代（東京藝術大学）

27

「ウチとソトを分かつ顔・つなぐ顔―その進化と発達」

橋彌 和秀（九州大学）

41

IV	第二部 トランスカルチャー状況をめぐって	
	「魂／機械／知性―トランスカルチャー状況とハイブリッド化をめぐる人類学的考察」	
	佐藤 知久（京都市立芸術大学芸術資源研究センター）	63
	コメント一	
	金沢 創（日本女子大学）	81
	コメント二	
	河野 哲也（立教大学）	85
V	総合討議	
	顔・身体学とは	113

I 趣旨説明

床呂 郁哉 (AA研)

それでは時間になりましたので、そろそろ始めさせていただきます。ご着席をお願いできますでしょうか。よろしくお願いいたします。

(以下スライド併用)

#1

それでは、これから第三回公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」を開始させていただきますと思います。私は司会進行を務めさせていただきます。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の床呂と申します。よろしく願います。すみません、ちよつと喉の調子をおかしくしております、お聞き苦しいところがあるかと思いますが、あらかじめお許しください。

改めまして、本日は大変お忙しい中、三連休の最後の日ということになりますけれども、必ずしも交通の利便性がいとは決して言えない府中キャンパスまでご来場くださいまして、本当にありがとうございます。また、今日は学園祭がありまして、学園祭の最後の日ということで、会場に着くまでに迷われた方もいらっしゃるのではないかとこのように思いますけれども、本当にご参加ありがとうございます。



#2

最初にまず私から、ごく簡単にシンポジウムの趣旨説明をさせていただきたいと思えます。今回のシンポジウムですが、科研・新学術領域「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」のアウトリーチ活動、成果公開活動の一環であるというふうには、まずは大きな枠としてはいえるかと思えます。この同じ名前のシンポジウムを、実はご参加された方はご存じかと思いますが、二〇一六年、二〇一七年に続きまして、これで三回目です。それから、これ以前にも、微妙にタイトルが異なるシンポジウムを入れますと、実は今回でもう四回目ということになります。

そして一件、あらかじめお願いといいますが、ご了承を頂ければと思うのですが、昨年までもそうなのですが、毎年この公開シンポジウムに関しては、冊子化、録音して、文字起こしをして、冊子にして配布することをさせていただいております。受付のところに昨年までの冊子をサンプルとして持ってきております。ご存じない方はご参照いただければと思いますが、今回も可能であれば、冊子化を前提として考えております。討議のご発表やディスカッション等を録音、それから撮影をさせていただくことを、あらかじめご承知おきいただければと思います。よろしくお願いたします。

今回のシンポジウムの母体となっているこの新学術の科研に関しては、後ほど領域代表の山口先生からご説明があるかと思いますが、簡単に雑ばくに申しますと、現代的な状況下における顔や身体表現に関して、哲学や心理学、人類学などを含んだ学際的な共同研究の試みであるというふうには、まずは言うことができるかと思えます。今回は、昨年までのシンポジウムの方式を踏まえつつ、一部変えた形で、第一部と第二部、前半と後半ということに分けております。前半に関しては、これは昨年までと同じ形式ですけれども、顔・身体研究の諸相と題しまして、さまざまなディシプリンから、今回はわれわれのこの科研の公募班

の関係者の三人の先生から、それぞれのデイシプリンの立場から、もしくはその研究対象に関する個別のご報告を頂くことを予定しております。これが前半です。

#3

それから後半は、昨年までと若干やり方が異なるのですが、「トランスカルチャー状況をめぐって」と題して、集中的にこのテーマに関してディスカッションをしていくということ、今回のシンポジウムの大きな目玉といえますが、特に強調している点であります。と申しますのは、このトランスカルチャー状況というのが、われわれの科研の課題で一つキーワードとして、掲げているということもあります。この後半に関しては、京都市立芸術大学の佐藤知久先生から問題提起のご発表を頂いた後に、われわれの今回の科研の計画班のお二人の先生からコメントを頂いて、総合討議をするということを考えております。

トランスカルチャー的な状況とは何かということに関しては、それこそ後半のセッションで詳しくディスカッションがあるかと思いますが、私から一言だけ簡単に、これは私見ですが少し申し上げますと、電子メディアの発達等によつて文化や情報というのが、地域や国境を越えて動く、流動する現象、あるいは混交していくような現象と深く結び付いているであろうと。いつてみれば、文化のグローバル化、グローバリゼーション、グローバル化といったような問題とも絡んだキーワードであろうというふうに考えています。こういう状況に関しては、既にさまざまな研究者がさまざまな指摘をしています。一方では世界な規模で、文化の標準化や同質化、特に欧米化といったような圧力が働いている。他方ではローカルな文化的な差異やアイデンティティを強調するといったような動きがあるということがしばしば指摘されます。

私どもは、昨年までのシンポジウムでも、幾つか出た論点の一つですけれども、顔や身体

をめぐっても、標準化と差異化といったような現象の同時進行というようなこともあるのではないかと。具体的な例としては、セルフイーを撮って Facebook をはじめとする SNS にアップして、全世界に公開するというアメリカ発のそういう行為と、例えばイスラム圏などに目を移せば、イスラム教徒の女性が自分の髪を隠す、ベールやスカーフを着用することが増加するというような現象です。今写っている写真は、今年の夏にインドネシアで私が撮ってきたものですが、イスラム教徒の女性がセルフイーを撮っているというように、次の写真もそうです。これは単なる一例ですが、そうして現象も含んだ、トランスカルチャー的な状況に関して、後半ではお話がいろいろなされるであろうというふうに考えております。

4

本日のプログラムは皆さんのお手元にもあるかと思いますが、時間の関係で、今ここで、全て読み上げることはいたしません。先ほど申しましたように、第一部がそれぞれのディシプリンからの三人の先生より顔・身体研究の個別のご発表、そして第二部が先ほど申しましたように、トランスカルチャー状況をめぐる総合的なディスカッションのセッションというふうに考えております。

5

以上、大変雑ばくで駆け足でしたけれども、私からの趣旨説明は以上ということにさせていただきます。よろしくお願いいたします。

早速ですけれども、引き続きまして、領域代表の中央大学の山口真美先生からご挨拶を頂ければと思います。

Ⅱ 一し挨拶

山口 真美（中央大学）

#1-2

ご紹介いただきまして、ありがとうございます。中央大学の山口と申します。本領域、「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」は、ホームページも立ち上げております。こちらの領域長をさせていただいております。今回は、トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築の領域のシンポジウムとして、文化人類学班の若い方々の発表と、トランスカルチャーについてのご発表、この二つの構成でお願いすることとなっております。こういう構成になったそもそもと、本領域についてお話しします。本領域、「トランスカルチャー状況下の顔・身体学の構築」については、後半のお話から何となく分かるかと思うのですが、そもそも前半の「トランスカルチャーとは何？」というのが、本領域がそれぞれ研究をしていく中で大きな宿題となっております。この宿題を、人類学班の方々と、哲学班の方々と、私たち心理班とで解いていこうというところが本領域でもあります。二〇二〇年の東京オリンピックを挟んで、多様な国々が交流していく、そのありようを示していきたいということで、進行しているプロジェクトでもあります。

今年、トランスカルチャーの象徴的なものは、大坂なおみさんみたいな日本人で、きつともっと増えていくであろうと思います。「日本人って何？」と、ざわざわする方々もいたりもするのですけれども、日本語を話せるから、ずっと日本に住んでいるから日本人だという

#2



わけではなくて、いろいろなものがミックスして、「それぞれ輝いている」というところになつてほしいと思います。

#3

つい昨日、大阪万博も決定したようで、日本はトップダウンの決定で外国人がたくさん入ってくる状況になっていくと思うんですね。でも、決定した映像を見ると、決定が決まるシーンですごくジェンダーバランスが悪いというような感じもあり、いずれにせよ後々、日本社会が変わっていきつきつかけになっていったらいいかなと思います。

#4

床呂先生からもう説明されましたように、今の日本は制度的な決定から、いろいろな国や地域の方々が入ってくる。けれども、今日は入れ墨のご発表もありますが、入れ墨の受容は大きな社会問題となっています。入れ墨の研究班にはたくさんのアウトリーチをしていただいていますが、というのは今、ホットトピックになっているからです。私の中国人の友人が言っていたのですが、そもそも日本語の「顔」のこの部分（左下）は入れ墨をあらわすものだったと。彼女一人の話なので本当にそうなのか、調べなくてはいけないのですけれども、もともとは入れ墨というのは、私たち古い日本社会では受け入れられていたのが今、避感に変わっている。その忌避感の中には、異文化に対する意識下の抵抗的なものがあったりする。一方で先に雄お話ししたようにたくさんの方の異文化が流入してきますし、さらにメディアの変化で Facebook にたくさんの方の顔をアップして、たくさんの方の外国人の顔を見ている状況があります。こういう状況の中で、私たちはどのように変わっていくのであろうかということを示していけたらと思います。



#5

これも何度も話してきたのですが、その中でなぜ顔・身体かというのと、顔・身体というのはコミュニケーションするツールとして、とても優れたものであるからです。一方で、意識の外でディスコミュニケーションが生まれる場に顔・身体がかかわっています。初対面の人に会うと、欧米の人は握手をするわけですね。それはもう無意識のうちになるけれども、一方で、私たちは無意識のうちにお辞儀をするわけです。この二者が出会う時すでに顔・身体では何かすれ違ってしまったている。こういうちよつとしたすれ違いの状況というのは、実はいろいろな場面であるのではないか。一方で、日本のお辞儀も、いつでも西洋風にふるまうということなく、取り入れてくれている外国人もいる。

#6

「顔・身体学」領域の研究活動の中では、日本発の顔・身体を多様に変えていくさまざまな技術を軸に、顔・身体の変容を受容する試みを行ないます。私自身がプロジェクトンマッピングだったり、プリクラなりでいろいろ変わっていく、その変わりゆく自分を見ていく中で、身体性はどのように変化していくのか。特に今年になって、はやっているらしい、virtual reality chat (VR Chat) があります。つまりアバターの中での私で楽しんで一日を過ごしているような人たちもいるとなると、「私って何?」「顔・身体って何?」ということを考えさせられます。顔・身体の変化から、変わっていくものは何?そしてアイデンティティはどこにあるかを考えることになるのではないかと思っております。

#7

心理班の中で、どのようにして異文化を考えるに至ったかということをちよつとだけお話

しさせていただきますと、私の共同研究者のロベルト・カルダラ教授（スイス・フリブール大学）が、これまで表情は世界共通と考えられ、実際にいろいろな国の表情は互いに読み取れるけれども、細かく解析していくと違いがあることを示しました。日本人はたとえば目から表情を伝えて、欧米人は主に口から伝えるのです。

8

これは絵文字にもあてはまりません。日本の絵文字は目で表情を伝えるけれども、欧米に行くとき口で表情を伝える。それがまた、日本人はマスクをしても大丈夫、向こうはサングラスをしても大丈夫ということになります。どういうことかという点、私たち日本人は目で表情を伝えるので、口元を隠しても、あまり忌避感はない。ただ逆は、忌避感がある。目元を隠すことにすごく忌避感があるということで、これもまた、興味深いエピソードがあります。平昌オリンピックのチェコスロバキアのレデツカ選手は、金メダルを二つ取ったのです。スキーとスノボで金メダルを二つ取って、元々がスノボの選手でスキーで取れるとは思わなかった。それで、ノーメイクで試合に出たのです。日本人の女の子なら、ノーメイクで人前に立つとなると、みんな慌ててマスクをしますが、彼女はノーメイクで記者会見することとは絶対に嫌だということ、記者会見前にメイクする時間が設定されていなかったのでしょう、このようにサングラスを掛けたままの記者会見をしたのです。これはもしかしたら、日本人だったらマスクで記者会見するだろうなというところになります。顔の中で隠してもいいところと露出せねばならないところが、違うということです。

ちなみに、オリンピックレコードでは、全ての選手の記者会見場面が残っているのですけれども、この記者会見場面は削除されてしまったようです。

9-11

このように、私たち日本人を含む東アジア人と欧米人では、顔を見る際に注目するところがちよつと違っているということがわかります。私たちの研究から、その違いは何と七カ月のころから生じているということもわかっています。つまり、七カ月の子どもでも表情を見るときに、日本人乳児は目元に注目するのに対し、欧米人乳児は口元に注目する。このようにそれぞれの文化適応は意外に早いということなのです。

12-14

この文化適応は、*perceptual narrowing* と呼ばれていて、九カ月以前の乳児は、あらゆる生物の顔を区別する能力を持っているけれども、それがヒトに限定される。同じことが、顔を見る能力だけではなく、言語にもあてはまるのです。これはアメリカ人乳児のヒンディー語の音声識別の結果です。ヒンディー語の子音の聴覚的な識別ですけども、八カ月までは識別できるけれども、十カ月から聞き慣れない音声言語は、聞き取れなくなってしまうと。つまり、言葉も顔もおおよそ九カ月くらいで、自分の文化に入っていくということになります。

15

それは具体的にどのように進むのか。文化適応は八カ月から九カ月で、言語も顔も同じ時期に適応していくといわれているのですが、この二つを比べると顔の方が早いともいわれています。つまりヒアリング能力よりも相手の顔を見る能力の方が獲得が早い。そういう顔・身体のもつ力から、トランスカルチャーについて考えることができるのではないかと思えます。トランスカルチャーとは何か、どのように適応できるのかについても、考えることがで

15



きたらと思っています。

16

床呂先生にご説明していただきましたように、本領域はたくさんの方のご協力、特にこちらのA A研の皆さまのおかげで様々なイベントを行ってまいりました。今年の三月にはバリ島でワークショップを行いまして、このような心理学のフィールド実験もやってみようという事になっています。

17
18

また、「顔・身体学」の中の身体の方ですが、「バーチャルリアリティの世界ではどうなるか」というシンポジウムを日本科学未来館で行いました。実は、そのときのツイートがすごかったらしいのです。一時間で三十万リツイート。私はこの感覚がよく分からないのですけれども、三日くらいでこのくらいのリツイートがあることは、すごい大反響だったらしいのです。異なる文化によって見た目が違う、見るところが違う。そしてバーチャルリアリティの世界で私自身がどう変わっていくかということが、新たな異文化、技術的に作りあげられた異文化の世界の中にある、ということを考えています。

19

いろいろな領域の研究が合同で、一緒に考えていくことが目的で、本日は「トランスカルチャーって何？」という問題を、ともに考えていっていただければと思います。ということ、本日は、どうぞ、顔・身体学の領域から、よろしくお願いいたします。



17



16

(床呂) 山口先生、どうもありがとうございます。領域全体に関して分かりやすくご説明を頂きました。

それではプログラムに従いまして、本日の前半のセッションに入っていきたいと思えます。先ほどアナウンスさせていただきましたように、第一部、前半ですけれども、「顔・身体研究の諸相」と題して、三人の先生にご発表を頂く予定となっております。まずは、京都造形芸術大学の大貫先生にご報告をお願いしたいと思います。

準備をしている間に、簡単にご紹介をさせていただきますと、大貫先生は京都造形芸術大学で、もともとご専攻は芸術学、美学ということかと思えますけれども、この科研の枠の中では都留文科大学の山本芳美先生の公募班のグループのメンバーでいらつしゃるということことです。この山本先生のグループは、ご存じ方もいらつしゃるかと思えますけれども、先ほどの、今日もご報告を頂く入れ墨をはじめとする身体加工に関して、人類学者あるいはその芸術学の立場から研究をされているということ、本日は『かぶき』思想の身体表象としての「イレズミ」という刺激的なタイトルでご報告をお願いしたいと思います。

それではご報告に十五分くらいで、質疑五分くらい、時間を取れるかと思えます。それでは、ご準備はよろしいですか。では、お願いします。

#18



Ⅲ 第一部 顔・身体研究の諸相

『かぶき』思想の身体表象としてのイレズミ

大貫 菜穂 (京都造形芸術大学)

初めまして。京都造形芸術大学の 大貫と申します。本日は、『かぶき』思想の身体表象としてのイレズミ」というタイトルで原稿を読みながらお話をさせていただきたいと思えます。

こんにちはの日本では、イレズミを道徳的でないものとして白眼視する傾向にあります。もう少し言いますと、一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、日本国内で急速に広まった欧米由来のタトゥーと、江戸期からある日本のイレズミ、ほりものとの間には、前者はファッション、後者はやくざ的なものとして、捉えられ方に温度差があるように思えます。現に、私が携わった、イレズミを入れた人が海水浴場に入れるかを調べる調査でも、ファッションタトゥーか、そうでないもの、つまりほりものかという判断基準が存在していました。

#3

今、前に少し最近の漫画の例を出しましたが、割と価値観の間口を広げるような、若者向けのこういう創作にさえも、やくざ的なものとそうでないイレズミを分けるといふ傾向が見受けられます(図1)。



図1 右図…HERO『堀さんと宮村くん』第二巻、スクウェア・エニックス、二〇〇九、二八頁、左図…同第三巻、二〇〇九、一一八頁

この要因には、もちろん山本芳美先生が指摘したようなやくざ映画の影響があり、特に暴対法確立以後、反体制の象徴であるほりものが嫌悪されるようになったともいえるでしょう。そして問題は、国内の人のみならず、国外の人々に対しても、それがどのような意味なのかも考えずに、同じロジックで他者のタトゥーを否定するようになったことです。この現状を踏まえると、私たちは急いでイレズミの価値を再考し、場合によっては新たな価値を見つけなければなりません。

#4

したがって、私が今日焦点を当てたいのは、昔の人々がほりものに価値を見いだせていた基盤は何か、そして、それが衰退した理由は何か、現在の私たちは、そうした来し方行く末にどう対処すべきか、ということです。

今回は、ほりものをめぐる価値の基準が、近世から現代までどのように変化したのかを考えるための補助線としてかぶきという概念や芝居を取り上げて考察します。日本のイレズミないしほりものやその感性が、どのような社会的・文化的価値観に根差し、そして変化にさらされたのか、見えてくるものがあれば良いと思います。

#5

まずは、「かぶき」という言葉をめぐるところからお話を始めさせていただきます。現在では伝統芸能として知られる芝居、歌舞伎ですが、本来同じ読みで異なる漢字を当てる言葉があります。それが「傾奇」という文字で、「かたむいていて、奇妙である」という字を当てています。この傾奇は、戦国時代終わりから江戸時代初期までの、人々の生きる態度や、そこで生じたファッションを指しています。そして、そこから、よく知られている芝居の歌

舞伎が派生し、洗練された芸能へと進化したというのが実情です。よって、国文学では、この二つの「傾奇／歌舞伎」を根が同じものとし、それらを一連の庶民文化のダイナミズムとして論じるときは、平仮名で「かぶき」と、よく書かれています。

では、「かたむいて、奇妙な」という傾奇は、どのようなものかを確認します。今、映している岩佐又兵衛の屏風なのですが、青で囲った部分にタケノコのような変な服装をした男の人が描かれています（図2）。傾奇は、このような男性の異装を意味しました。とりわけ江戸時代の初期の、江戸や京都などの都市部では、異風を好み、派手な身なりをし、社会や常識を逸脱した行動に走る「傾奇者」たちが多くいたとされています。この彼らの身なりや行動とは、室町時代における庶民と支配階級との闘争を経て、戦国期を境に崩壊した、世間の常識や権力、秩序へ反発する精神の表現です。その表現の担い手は、多くが武家へ奉公するやり持ちや草履取りなどの身分階級の枠外に置かれていた人々でした。極めて低い階級の戦い手だった彼らは、仲間同士の結束と信義を重んじ、死を恐れず命を惜しまない信念を持っていました。それはなぜかという点、政局の不安定さや身分制度の崩壊を目の当たりにして、立身出世に意気込んで戦へ参加した者も多くいたからだと言えます。つまり、弱い彼らには相互扶助も必要だったということです。ただ、そうはうまくいかず、戦でいつ自分の命が絶たれるか分からないとむしろ実感させられることになり、自由な生を求めるようになります。しかし、戦乱の時代が終わり、彼らを待ち受けていたのは、再び身分階級に縛られる閉塞的な日常でした。そこへの反発心が、彼らを異装に駆り立てたのです。

#6

この一連の流れは、次第に江戸期を代表する「男伊達」という風俗へと変化し、男の面目を立てる、強きをくじき弱きを助けるといった生き方の価値観を形成しました。これは当初、



図2 岩佐又兵衛〈豊国祭礼図屏風〉左隻 部分、一七世紀、一六六・七×三四五・〇cm、徳川美術館蔵、文化遺産オンライン、<http://bunka.ni.ac.jp/heritages/heritagebig/18957/1/4>（最終閲覧日：二〇一九年六月一九日）

武家や一般民衆・部落民といった、それぞれの身分に応じて共有されていた価値観だったようにです。

さて、江戸期における日本のイレズミの発展を考える上で重要なのは、今、先に述べたような異形で豪華なふん装の誇示、つまり傾奇や男伊達の精神を視覚的に表す身体表現の延長線上にそれがあるということです。

このことについては、次の二つのポイントがあります。一つ目のポイントは、時代が下り江戸幕府が安定する頃には、男伊達は庶民以下の階層に特化して共有される価値観になったことです。士農工商という身分制度において最も低い階級である商人が経済的に富み、江戸期の文化の強力なパトロンとなったことは知られているのではないのでしょうか。彼らは、為政者が守ってくれない庶民の町の自治をバックアップし、大衆芸術である歌舞伎や浮世絵を支えますが、後で見ると、男伊達の表現は彼らの芸術で強調されてゆきます。

二つ目のポイントは、そのような経済的・文化的発展を背景に、男伊達が庶民の中でも勇ましい義侠心を持つ者に当てはめられていったということです。そして、この男伊達精神を芝居や絵画ではなく、現実に体現した代表者が、江戸後期に確立した「町火消」でした。木と紙ででき、強い風に吹かれる江戸の町にとって、火事は常に大きな悩みの種でした。その中で、町火消は庶民の町に火事が起こったときに出勤する自治組織で、めいめい担当する区の人々の命を守ることに誇りを抱いていました。

そして何より彼らこそが、江戸後期、とりわけ文化文政期以降の日本のイレズミ、ほりもの代表的担い手だったことが重要です。私たちはここに、いったん心掛けたことを徹頭徹尾成し遂げ、お互いに助け合うという発想が貫かれてきたことと、その心を外見や振る舞いで示すこと、つまり、傾奇、男伊達の精神が、ほりものという装いに結合したことを見ることができます。

今、前に出しているのが、歌川国芳が描いた絵馬で、赤で囲っているところを下で拡大しました(図3)。ちょっと見えづらいかもしれませんが、これが火消のとある一つの組なのですけれども、その前を誘導している人たちにほりものといわれる形式のイレズミが入っています。彼らにいきなり強い結び付きがあつて、それを先導するリーダーたちにほりものが入っていたことに意義があつたのかを見るには良い作例だといえます。

#7

ここまでかなり駆け足ですが、日本の傾奇、男伊達という思想と、それがほりものに結合したことを概説しました。ここからは、具体的に歌舞伎の演目や、浮世絵の事例に即してほりものを考察したいと思います。

今回取り上げるのは、歌舞伎の『夏祭浪花鑑』という演目と、その舞台や役者を描いた浮世絵です。まずは、歌舞伎から見ていきたいと思ひます。

『夏祭浪花鑑』は、ほりものが登場する代表的な演目で、延享三(一七四六)年に京都で上演されたものが最初です。これは、もとは人形浄瑠璃の演目であり、その初演は延享二(一七四五)年、の大坂でした。このように、早期に人形浄瑠璃から歌舞伎へ移植されたことは、この物語が当時の観客の心を強くつかんだことを意味します。作者等の情報や物語全体のあらずじは配布資料にまとめましたので、適宜ご確認ください。

##

ちなみに、今前に出したのが、戦後のこの演目の興行リストです。ちょっとまとめてみました。「仇討物」などがあつたので、歌舞伎には、明治期以降一度上演が禁じられた演目がすくなくたくさんあつたのですが、一九四七年にGHQが古典歌舞伎を解禁して以降、『夏祭



図3 歌川国芳《火消千組の図》絵馬部分、一八三三(天保八)、成田山靈光館蔵、『探検! 体験!! 江戸東京』江戸東京博物館、二〇一四

浪花鑑』は計六十五回とコンスタントに上演されていることが分かります。細かくはお見せしている余裕がないのですが、二〇〇〇年代以降もほぼ毎年上演されていて、この演目がいかに定着し、人気を呼んでいるのかということがよく分かるかと思えます。

この舞台のクライマックスは、団七が舅の義平次を殺す場面が含まれる七段目、通称「長町裏」「泥場」というところです。その見どころは、まず団七が高津神社の宵宮の祭囃子を背景に、泥にまみれつつ、舅殺しをする際、十三回という非常に多くの見得を切る、つまり、表情やポーズを一瞬止めて、その心情を表現するという様式美が挙げられます。そして何より彼の体の美しいほりものと、祭の夜の裏側で泥だらけになっている状況とが鮮烈な対照をなしていて、観客の目をいや応なしに引きつけます。ここでちよつとぶつ切りになるのですが、映像で重要な場面を見ていただきます。

先に説明をしますと、この手前の人物が主人公の団七です。後ろが、金に強欲な舅の義平次です。ポイントとして、全体を通して、せりふやしぐさ、表情に注目していただければと思います(図4)。

— 映像 —

#8

今見ていただいた演目が『夏祭浪花鑑』で、これは平成中村座がニューヨーク公演を行ったときのものです。このポイントですが、団七が刀に手を掛けるきっかけが、顔を傷つけられたことであるというのが象徴的です。要するに、男伊達で重要だった、男の面目がつぶされているということです。

義平次を沈めた泥沼に、蓮(ハス)の花が咲く描写があったかと思えます。これは義平次



図4

『中村勘九郎 平成中村座ニューヨーク公演
夏祭浪花鑑』フジテレビ、二〇〇五、本編
一一二分・抜粋

への吊いだけでなく、蓮が泥の中にありながら、清く美しく咲くという仏教の教えを用いて、団七の置かれた状況や心情を視覚的に表現しているといえるでしょう(図5)。

最後に笑い泣きのような表情で、千鳥足で花道を通って去っていくというのが団七だったのですけれども、これは、彼のやり切れない思いを表現した結果、ああいう演技になったと考えられます。

#9

さて、この場面で、団七と彼のほりものは何を示唆するのでしょうか。ほりものを背負う団七が男伊達を体現する存在であるということは、映像や配布資料から読み取っていただけるかと思えます。ですが、そうした彼が、なぜ男伊達という精神を貫き通すことにこだわったのか。この演目を演じるポイントは本来、大坂の「泥臭い」、下層の生活のよこれがにじみ出た人物」によって「彼等の自己主張の中の、いたましいような切羽詰まった思い」を表現することが重要だそうです^(注1)。これは引用一に元の文章を掲載しておりますので、ご参照ください。

歌舞伎は今でこそ世界的な無形文化財ですが、江戸時代においては庶民や賤民が見るもので、千両役者といわれ財を成した役者でも、往來を歩くときは頭巾、編笠で顔を隠さねばならないと幕府に決められていたほど、いわゆる上流階級とは隔たった存在でした。特にこれは上方発祥の歌舞伎ですから、近世以降いろいろな所から人が集まってできた江戸よりも、さらに根深い身分の問題を含んでいます。

実は団七は、今見せたシーンの前では、義平次を殺害する前に、自分の舅の悪巧みを丸く収められないか説得を試みています。ですが、元は浮浪児で、封建的階級の外に置かれた貧乏な魚売りである彼には、事態を收拾するためのお金がないのです。自分の親同然の人物の

図5 「中村勘九郎 平成中村座ニューヨーク公演『夏祭浪花鑑』」フジテレビ、二〇〇五、本編 一二二分・抜粋



注1 全体として、大坂のごく下層社会に属する男だてやその妻が、異常とも見えるほど面目にこだわり、意地をつらぬくドラマであるが、そうまでしなくては存在を認められない無頼の徒の自己主張が、原作には認められていた。現行の歌舞伎では、そして文楽でさえ、主人公たちはすっきりと洗い上げられて、恰好のいい人物になりすぎている。本当は、もっと泥臭い、下層の生活のよこれににじみ出た人物でないかと、彼等の自己主張の中の、いたましいような切羽詰まった思いが表現できないと思われる。
松崎仁『夏祭浪花鑑 伊勢音頭恋寝刃』白水社、一九八七。

悪事を見過ごすか、恩人の窮地を救うべきか、つらい選択を迫られた結果、彼は意図せずに義理の親を殺してしまう。そうなったふがいなさを一番理解しているのは、他でもない団七自身で、その心情が、芸や団七の表情で表現されていました。

つまり、罪を背負ってでも義理人情を守ることが彼は選んだのであり、その傾奇、男伊達精神が、舅殺しのシーンにおけるほりもので表現されているといえるでしょう。この演目やほりものには、そうまでしないと自分の存在を認められない無頼の徒の自己主張が込められているといえます。すなわち、『夏祭浪花鑑』の登場人物やほりものは、前章で示したほりものの主要受容者層である町火消と同じ精神構造を持ち、それゆえ京阪神でも江戸でも、庶民の共感を広く得たのだと指摘できます。

#10

では、団七が背負うほりものの絵柄には、どのような意味が込められていたのでしょうか。実は、人形浄瑠璃、歌舞伎ともに、初演では団七にはほりものがなく、この演目にそれが定着したのは、天保期（一八三一年）以降だとされています。ただ、管見の限りでは、もっと早い時期の『夏祭浪花鑑』の団七をモチーフにした、役者絵というジャンルの浮世絵に、ほりものが描写されていることが分かっています。

前に出している三作品がそれで、上方の絵師、春好斎北洲と豊川梅国によって文政六（一八二二）年、に描かれました（図6、7、8）。これらは、ほりものが明和・安永年間の発生以降に、江戸ではなく上方で命脈を保っていた作例として貴重であるとともに、ほりもの登場以前の日本のイレズミ、起請彫に込められた願いを受け継いでいる点にも注目されるべきです。



図6 春好斎北洲〈団七九郎兵衛 中村歌右衛門〉



図7 春好斎北洲〈団七九郎兵衛 中村歌右衛門〉



図8 豊川梅国〈団七九郎兵衛 中村歌右衛門〉

図6・7・8とも一八二三（文政六）年版行。大判錦絵。所蔵・出展：財団法人阪急学園池田文庫蔵、財団法人阪急学園池田文庫編『上方役者絵集成 財団法人阪急学園池田文庫蔵 上方役者絵』一四卷、一九九七

#11

起請彫は入れぼくとも呼ばれ、室町後期には文献で確認できる日本のイレズミの一つです。それは、江戸時代半ばには、京阪神と江戸の両方で、恋人同士の契りや、人が神仏や自分身に何かを誓うことを示すイレズミとして発展しました。今前に出ている『夏祭浪花鑑』の三点の役者絵を見ると、共通して不動明王の象徴である剣や龍を主題としたイレズミが入っています(図9、10、11)。そして、これら全てに、次の二重の意味が付されています。一つは、イレズミの龍神のモチーフと、これを背負う団七が魚売りであることの関係性です。当時、水に関わる仕事に就く者が特に加護を求めたのが龍神でした。つまり起請彫で人と神が誓約を結んでいる側面を強調していると指摘できます。

次に、剣や龍が象徴している不動明王を、団七の物語との関係性から読み解くことができます。不動明王は煩惱を抱える者を正しい道に引き戻す仏です。すなわちこれは、団七が舅という悪を成敗することと、舅殺しの葛藤を抱えることの両方を表象し、ともすると団七が不動明王と一体化していることを示唆する絵柄だといえるのではないのでしょうか。現代の演目のほりものは、牡丹等の赤い花が多く見られます。しかし、当時の役者絵からは、団七の男を立てていることともに、彼への救済や加護を見いだせるのです。

#12

最後に、これまでお話したことに鑑みて、近現代を視野に入れた締めくくりをしたいと思えます。

社会の身分階層というコンテクストの中で、生きる人を寿ぐすべとして、「かぶき」が精神・芸能ともに発達し、イレズミという身体装飾も、それに交わりながら発展しました。そもそも、近世の芸能等の大半は、日本文化の身分階層において内なる他者とされる、階層外

図9 春好齋北州《団七九郎兵衛 中村歌右衛門》前掲図6部分



図10 春好齋北州《団七九郎兵衛 中村歌右衛門》前掲図7部分



図11 豊川梅国《団七九郎兵衛 中村歌右衛門》前掲図8部分



に置かれた人々に根差して発達したものです。

しかし、長き江戸時代を終え、明治期以降の近世文化には、西欧の近代的価値観、さらにいえば西欧由来の「芸術」概念を基盤に評価されるといふパラダイムシフトが起きました。この変化は、芝居や文化の擁護者、厳しい批評者、そして表現者だった文豪の言葉にも如実に表れます。

ここで、イレズミとゆかりの深いある文豪による文章を借りて、近代日本のイレズミや、それと精神をともにした歌舞伎に対峙する、心境の変化を説明したいと思います。

「其れはまだ人々が『愚』と云う貴い徳を持つて居て、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。(注2)」これは、谷崎潤一郎『刺青』、有名な作品ですが、この冒頭としてよく知られる文章です。詳細は引用二として掲載していただきますのでご参照ください。谷崎は文明開化も盛んな明治末期に、時代に反して近世の大衆芸術の美を称賛します。この小説からはるか後年、彼は、昭和二三年の「新文学」八月号・十月号誌上で「所謂痴呆の芸術について」と題し、歌舞伎を引用三のように批評します(注3)。引用三も掲載しておりますので、ご覧ください。

この文章の谷崎の態度は、夏目漱石が歌舞伎の特色を「極めて低級に属する頭脳をもつた人類で、同時に比較的芸術心に富んだ人類が、同程度の人類の要求に応ずるために作つたもの(注4)」と西洋的芸術の規範で断じたのと対照的な位置にあるものです。それは、「近代的理性」という文明に照らすと、歌舞伎という近世的な情や美を詰め込んだ痴呆の芸術は悪趣味で安っぽい、そもそもこれは近代の論理を無視した世界観なのだからその良さが分かる者だけで慈しもうと、皮肉を込めて主張したものでした。

翻つて見ると、歌舞伎やほりものなどの日本のイレズミを、現代の私たちが受け入れられる可能性はどのくらいあるのでしょうか。谷崎の予想に反して、戦中戦後生まれの役者のさ

注2 其れはまだ人々が「愚」と云う貴い徳を持つて居て、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であった。殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬように、御殿女中や華魁の笑いの種が盡きぬようにと、饒舌を売ってお茶坊主だけの仲間だのと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であった。女定九郎、女自雷也、女鳴神、——当時の芝居でも草

双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であった。誰も彼も拳つて美しからんと努めた揚句は、天稟の体へ絵の具を注ぎ込む迄になった。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌に躍った。

谷崎潤一郎「刺青」『谷崎潤一郎全集 第一巻』中央公論社、一九八一。

(初出:「新思潮」一九一〇(明治四十三)年十一月号)

注3 (中略) もともと義太夫そのものが時代後れなのであって、義太夫語りは映画や新劇の俳優とは違い、古い封建の世界の中に自らを閉じ籠めて生きて行くのが、本来であろうからである。

(中略) ただ返す返すも互に相警めたいのは、これは(発表者註・歌舞伎は)世界的だとか国粹的だとかいって、外国人にまで吹聴すべき性質のものではないことである。三宅周太郎氏(発表者註:近代の京阪神の演劇評論家。文楽の興隆に尽くす。一八九二—一九六七。)は痴呆の芸術という代りに白痴美の芸術といっておられたが、まことにこれはわれわれが生んだ白

さまざまな試みによって、一九〇〇年代後期に歌舞伎は比較的若い層にも浸透し、興行成績も大躍進しました。そして、五代目勘九郎の渋谷・コクーン歌舞伎、平成中村座の試みで、『夏祭浪花鑑』と団七のほりものは、国内外の歌舞伎鑑賞者の衆目に晒され、賞賛とともに受け入れられてきました。

既に多くの場所で、近代の知性という考えに誤りや狭量なところがある点も指摘されています。イレズミもそのような価値観の中で徐々に否定されてきました。歌舞伎は型で表現するエンターテインメントを提供することで、切実な時代背景や願望を、私たちと少し距離を取れるかたちで、でも共感できる物語として、こんにちでも受容されているのだと思います。一方、イレズミは、身体という、どうしてもある種の生々しさを避けられない場所で表現されるものです。この生の身体が、イレズミで生きる態度を表現することに目をそらさず、または適切な距離を私たちが保つて接すること。こういったことを求められているのではないかと、私は思っています。以上で発表を終わります。ありがとうございます。

(床呂) 大貫さん、どうもありがとうございました。

それでは、若干時間は押ししておきますけれども、せっかくでするので、一つか二つ、ご質問なり、どうぞ。もしよろしければ、後ほど冊子化の都合もありますので、差し支えなければ、お名前とご所属とを言っていただければ、大変助かります。

(橋彌) ありがとうございます。九州大学の橋彌と申します。こんなに中村屋さんが見られるとは思わなかったので、楽しかったです。

伺いたいのは、ちよつと細かいところかもしれないですけども、『夏祭浪花鑑』では、前半で女性が、おかみさんが焼きごてで顔を焼くというシーンが出てきますよね。伺っていて初めて思ったのですけれども、あの行為も身体を不可逆的に加工するという意味を持つ

痴の児である。因果と白痴ではあるが、器量よしの、愛らしい娘なのである。だから親であるわれわれが可愛がるのはよいけれども、他人に向つて見せびらかすべきではなく、こつそり人のいないところで愛撫するのが本当だと思ふ。
「いわゆる痴呆の芸術について」篠田一士編『岩崎潤一郎随筆集』岩波書店、二〇一六。

(初出：『新文学』一九四八(昭和二十三)年八月号、十月号)

注4 「明治座の所感を虚子君に問われて」初出：『国民新聞』一九〇九(明治四十二年

て、イレズミと呼応していたり、最後の額が割れるというのも結び付いているようにも思えたのですけれども、そのあたりはどうなのでしょう。これはちよつとトリビアルな質問かもしれません。

もう一つは、日本でいわゆるドレスコード的に入れ墨を使うということは、例えば私は九州なのですけれども、九州だと宗像氏という、もともと海の人たちがいて、胸と肩に入れ墨をしている。多分、アイルランドのセーターみたいな感じで、溺れて死んでしまったときに、それで誰か分かるというふうに聞いたことがあるのですけれども。そういうふうに使う、グループのアイデンティティを示すために使ったりということは、日本ではあつたのでしょうか。日本ではというか、あつたのですけれども、江戸以降に使われているということ、例えば火消が同じ紋をみんな背負うとか、あまりイメージが湧かないのですけれども、そういうことはあつたのか、もしご存じだったら。

というのと、なかつたとすれば、それは何なのだろうと。例えばアイヌの人とか、女性が口のところに入れ墨したりというのがありますよね。その辺との対応というのは、どうなのだろうなど。ちよつともやつとした質問ですけれども、もしご存じのことがあれば、教えてください。

(大貫) 非常に、こちらも勉強になるご質問を頂き、ありがとうございます。まず最初のご質問でおっしゃっていた、お辰という人なのですけれども、あのシーンはこの演目の幾つか見どころの幕の一つで、身体の毀損についての文献がなかなか残っていないので、どこまでというの、私も断定しては言えませんが、先ほど、男伊達の話をしたかと思いますが、この演目では男伊達士の友情も重要な主題で、この女性もそこに参入してくる象徴的シーンなのです。あれは、美人な女性に逃げた磯之丞を預けられないというときに、自分の顔をじゅつと焼きごてで焼いて、「これでもか」と言うというシーンです。そういう意味では、

後年になると「俠(きゃん)」とか「鉄火肌」といつて、男に勝るとも劣らない、きつぷのいい女性を表現する言葉が出てくるのですが、ここで共有されている価値の中に、女性が参入するときの一つの象徴的なものとして、身体の毀損みたいなものがあると、この演目のお辰のシーンではいえるかなというふうに思います。

二つ目なのですが、おっしゃっているように、漁師町で死体が揚がったときに、誰の死体か分かるようにイレズミを入れるという文化はもちろんありまして、私は本当は今年の夏に九州にフィールドワークに行きたかったのですが、豪雨があつたので、行くのはちょっと駄目かなと思って、行かなかつたのです。ただ、電話調査で、四国とかそちらの方で海水浴場の調査をしたときに、やはり海で、都市部にあるいわゆるレジャー用の海水浴場ではなくて、ほとんど海で普通に近所の人が泳いでいるのよねというところも、電話を掛けて聞いたのです。そうしたら、その海の家を管理している人や市役所の人に言われてすごく印象的だったのが、「それは自分が恥ずかしくなかつたら、いいやん」という言い方をされたのです。それから、言葉的にも、その文化ごとに「要するにほりものが入っているということやろ」という言い方をされたりとか、こちらは「タトゥーが入っているのですけれど」という、そういういろいろなキャラクターにばけて覆面調査的にしていたのですけれども、その地元、地元の言葉で「スミ入っているってこと？」みたいな意味のことを聞き返されるということは、やはり漁師町でそういう文化が根付いていることは確かだろうなと感じました。

私自身が進めたいと思っているのはそういうところで、このほりものというものを私が扱う理由は、これが登場して以降、日本のイレズミは、このほりものの型にある程度統合されていくのです。ただ、西と東で、ちよつとずつ型が違います。それを調査したいのですが、そういうときには必ず漁師町というのは気になるだろうなというふうには思っています。

ちよつとこれも正鵠を得たお答えとは限らないのですけれども、今お答えできることです。

(床呂) どうもありがとうございます。質疑応答も大変興味深く、私も追加で聞きたいこともいろいろあるのですけれども、残念ながら時間が押している関係もありまして、以上でいったん、大貫さんのご発表、質疑のセッションは終わりということにさせていただきます。と思います。また最後に討議の時間が取れるかもしれませんがせんけれども。

それでは大貫先生、どうもありがとうございました(拍手)。

それでは引き続き、プログラムに従いまして、東京藝術大学の宮永美知代先生からのご発表を頂きたいというふうに思います。最初に申し上げましたように、前半の三人の先生は、いずれも今回の科研、新領域の公募班のメンバーの方でいらつしゃいます。先ほど大貫先生は、人類学もしくはその文化研究的な立場から、理性的に研究ということですが、今、ご発表いただく宮永先生は、美術解剖学という立場からのご報告ということで、「異国人をどのように描いたのか―絵画からの美術解剖学的考察」ということでよろしいでしょうか。それでは、お願いします。

「異国人をどのように描いたのか―絵画からの美術解剖学的考察」

宮永 美知代（東京藝術大学）

普段は美術の学生や、そういう専門の方々に解剖学、それからの形の見方みたいなことを講じていたりするのですが、今日は「異国人をどのように描いたのか―絵画からの美術解剖学的考察」ということで、お話をさせていただきます。

#2

まず前提として、人類は四六〇万年前、一番下のところに起源しました。これまでは猿人、原人、旧人、新人という、そういうグループ分けと、それが、直線的につながってきたと、多くの人類学者が考えてきたわけですが、意外にそのような直線的なものではないということが今日分かっています。また、ネアンデルタール人とホモサピエンス、私たちの祖先は、同じ時代を生きていたこともわかっています。

#3

そして、世界中の五十四人のDNAから導き出された二〇〇〇年の、遺伝子の調査によれば、並んでいる五十四人の中に日本人が二人、検体を寄せています。グアラニーとシベリアンイヌイト、上の方の人たちはエスキモーの人たちということが分かりますが、グアラニーというのは、中米の、ボリビア辺の人々です。なぜそういう遠いところの地域と私たちが近い遺伝的類縁関係にあるのかということも興味深いのですが、このようにして見ると、こちらの線で、非アフリカとアフリカとを分けることができますが、はつきりと線が引けて、



そして人類全ての共通の祖先というのが、アフリカであるとかわかります。すなわち、私たちのルーツというのはアフリカであるということです。

#4

これはカール・ジンマーからのもので、年代としてはもう少し前かもしれないといわれていますけれども、南の海洋を伝って、まず、アボリジニのルーツとなる人たちが渡っています。その後、一万年後くらいに北と南からアジア広く、そしてヨーロッパにという分布があります。この辺りには当時、ネアンデルタールが住んでいましたので、出アフリカをした人たちは、ネアンデルタールと交わった結果私たちは、約二・五%のネアンデルタール遺伝子を持っています。アジアの人々、ヨーロッパやアメリカの人々ですね。

#5

本日テーマにしていきますのは、時代ごとに異なるグループの人、これを「異国人」というふうにタイトルにはしていますけれども、国という概念がないこともあるので、「異人」というふうにも申しておきます。自分たちとは異なるグループの人を描いたいろいろな作例を見て、考えていただければと思います。大きくは、日本がどう異人を描いたのか。また、日本人を異人がどのように表現したのかという二つの視点です。これ以外のものもごさいます。

#7

まず日本の作例ですけれども、画家のみならず彫刻も入ってまいります。まず伎楽面です。これは正倉院御物、今年出てはいなかったと思えますけれども、この中にある醉胡従という

ものです。胡人とは、ベルシヤの人です。「大仏開眼」七五二年に、踊りを舞われたときに使われた面で酔ったベルシヤの人を表したという面です。ここに特徴的に見えるのが大きな鼻で、恐らく当時の古墳時代を経て、弥生系の渡来人が日本人の支配層になっていたならば、鼻はとても低かったので、こういう高い鼻を珍らしく思いより強調するような形で表現がされているということが分かります。

8

これも同じ演目の中で最後に王として出てくる、酔った胡人の王さまですが、やはり大きな驚鼻で狭顔で顔幅が狭いです。幅広の当時の日本人に比べると、異なる特徴を誇張した表現が見られます。

9

十六世紀、「南蛮人渡来図屏風」は、これ以外にもたくさん描かれています。これは狩野派の狩野内膳の屏風です。六曲一双の右双ですが、こちらには、船が到着して、人々がそれを迎えに出ています。

10

左双は、今度は船が出帆していくという状態です。この一部を拡大してみますが、

11
13

ここには南蛮人といわれるヨーロッパから来た人々、ポルトガル人、スペイン人たちが描かれています。中には東洋的な、日本のセミナリオの聖徒であるかもしれませんが、そうい

う人たちも混じっています。

#14
17

このようにないでたち、顔貌の中に、とても珍しいゾウであったりヒョウあったり、そういう動物たちも描かれます。傘を持つたり、周りにいる、はだしの、チョコレート色というかココア色の肌をした人物たち、これは大航海時代にアフリカから連れてこられた奴隷の人たちであるということです。この顔立ちなどを見ると、画家は本当によく特徴を捉えようとしています。そして、コーカソイド系（ヨーロッパ系）の人々以上に、多様な容貌を描き分けていることが分かります。

#18
20

それから到着した船の方ですけれども、こちらを見ていくと、マストを降ろしたり帆を上げたり、そのようなことをしながら、すごくアクロバティックに、マストの上で曲乗りでなっていますけれども、軽技する人物たちが描かれています。これもココア色の肌の人々です。

#21

当時、日本は通商のために国を開いていましたけれども、同時に布教のためにも異人たちはやって来ています。これはイエズス会の指導の下にセミナリオで学んだ画学生たちが描いたといわれる、作者不詳のヨーロッパ王侯の肖像画です。左がイスパニア、右がフランス。

#22

そして、アビシニアの皇帝です。アビシニアは、今のエチオピアの王です。それから、ペ

ルシヤ、イランの皇帝です。

#23

そういう諸公の特徴を聞きながら、あるいは実際に肖像などを見ながら、日本で西方の人々の姿を絵にしている状況がありました。

#24

鎖国をしていた江戸になり、これは十八世紀の佐竹曙山、司馬江漢の共作の「西洋男女図」です。ここには見たことのないヨーロッパ人を描いているので、全くヨーロッパ的にはなっていない、これはどう見ても日本人だろうという顔立ちの平たんさです。

#25

特にこの部分、プロファイルで目が鼻根とほぼくっついていてというような顔立ちは日本人的であり、ヨーロッパ的では全くありません。髪が、少し明るい茶色でウェーブしているというところに、ヨーロッパ的なものを見いだし得る程度です。

#26

それからこちらの方の女性の顔も、浮世絵の影響を非常に色濃く受けています。しかし浮世絵ならば、目は細く切れ長に描かれるのですが、ここではぱっちり描いています。また口も、浮世絵より少し厚い唇に描いています。そのような見たことのないものを、どういうふうに表現するかということ。恐らくこれは、ヨーロッパからもたらされた絵画から写されたものの模写、あるいはそれを基にクリエートされたものと考えます。

#27

それから、平賀源内の日本最初の油絵といわれている「西洋婦人図」。これも恐らく、ヨーロッパ女性を目の前にして描いたというよりも、作例があつて、その作例を元に模写していると思いますが、非常に熱のあるというか、知らない異国への憧憬の心情を豊かに持った作例であると思います。

#28
#29

同国人を描くのであれば、どういふところに美しさを見いだしているか、その時代、その土地の美意識がはっきりと現れます。十数年の間、秘されてモデルになっていたヘルガを、アンドリュウ・ワイエスは水彩やテンペラ、油彩で淡々と描いています。20世紀の北米の画家です。

#30
#31

時代はさかのぼりますけれども、これはイタリアのラファエロ・サンティです。「ラ・フォルナリーナ」という、同国人の女性の顔を描く。大きな目であるとか通つた鼻筋、小さな口元であるとか、そういう一つの美のかたちを、私たちは見ることができます。

#32
#33

では、異国で異人を描くという作例を見いきますが、五姓田義松は明治期に活躍した画家で、当時イギリスから来日していたチャールズ・ワグマンに師事し、後にフランスに行き、そこでこういう肖像を描きます。19世紀当時は美術解剖学がヨーロッパでは全盛でしたので、身体表現にも解剖学的な諸特徴、これが女性でこれだけ筋が出るかという、ちよつ

と怪しいなと思うのですけれども、内部構造を非常に意識しながら、美術解剖学もすごくよく勉強したのだというのが分かります。

#34

また、面立ちに過狭顔で、高い鼻筋、彫りの深い落ちくぼんだ目、二重瞼の存在感のあるまなざし、そういう日本にはない特徴を的確に、異国に行つて学び、表現していると思います。

#35

これは、藤島武二です。この画家もヨーロッパに、四十歳になつてから学びに行きます。「黒扇」という絵は、スペインの女性を勢いある筆致で顔に映ずる影や光を見事に表現しています。優れた作例で、これは重文になっています。

#36

国は違うのですけれども、これはポール・ゴーギャンの、タヒチの女性を描いた絵です。ゴーギャンも四十歳まで銀行員を勤めながらの日曜画家でした。絵を自分の仕事にしたいと、突然家族に告げて、ゴッホと一緒にいた時期も短期間ありますけれども、やがてタヒチに渡っていきます。

タヒチの女性の伸びやかな美を表現した非常にいい作品ではないかと思うのですけれども、見方を変え立場が違いますと、フランス領タヒチで、宗主国フランスから中年の画家が来て、そこに支配的な何ものもないということはありえないのではないか。つまり、宗主国側の文脈に絡め取られた、そういう存在である、と言う人もいるわけです。

37

日本人はどう表現されたのかということですからけれども。

38

まず、これをご覧ください。今日私が新宿から乗ったJRの席の向かい側に、ちょうどこういうおじさんがいて、ちよつとかぐわしい香水の匂いをさせている、そんな感じがするのですけれども、実は、今から四百年前の支倉常長を描いたものです。十七世紀に伊達政宗にローマに派遣され、数年間ヨーロッパで過ごしています。

39

着物の下にブラウスの襟が見えています。襦袢の替えなどなかったかもしれないので、しかし晴れ着のいでたちです。

40

支倉常長はどのくらいの身長だったかということとはよく分かりませんが、これは八頭身あるのです。当時の日本人はそんなに頭身指数は大きくなく、六頭身くらいなので、ちよつとこのスペインの画家によっておまけしてもらったかなと思います。歴史上の人物が親しみある姿で描かれていたのは驚きです。

41

オーギュスト・ロダンは日本人の女性を40点余り作り続けました。一人の人物に対してこれほど思いを込めて制作し続けたということは他にはなかったのですが、花子という日本の

女性です。花子は、明治初期に、自らの不遇な境遇から脱するために、いちかばちかで、芝居の一座と共に渡欧します。花子一座の興行は大評判となりフランスを拠点に、彼女はヨーロッパ中、公演することになります。ちょうどマルセイユで花子の演技を見たロダンは、ぜひ自分のモデルにと花子に願います。花子一座の興行は大成功を収めて、ヨーロッパのみならず、ロシアやアメリカにも足を延ばします。

ロダンのこの「花子の首」には日本女性の素朴な顔立ちが、見えます。ロダンは、最初は、花子の額から鼻にかけての顔立ちを割と堀を深く表現しています。

#42

でも、こういう日本人らしい平板な、頬骨が出て、鼻の低い、そういう素朴な感じというものを表現するに至っています。

#43

これがその花子さん、本名は太田ひさという人の写真なのですが。

#46

森鷗外の小説に『花子』という短編があります。鷗外は花子とは一度も会ったことがないのです。でも、同時代の人であったということで、その小説は完全にフィクションなのですから、鷗外は花子について、少し不満を持っていたかもしれませぬ。そういうことを、小説を読んで感じます。

#44
45

これが、別の花子の像です。こういう捉え方を見ると、日本人の顔であると同時に、鼻筋が通っていたり、いわゆる私たちの言う「バタ臭さ」というのですか、そのようなものを感じますね。

#46

ドナルド・キーンは、鷗外の『花子』について、「西洋人が東洋人を見て、魂まで読めて美術にそれを伝えたということは初めてであろう。(中略)が、鷗外がその面会の瞬間、東洋が神秘でなくなった瞬間……の偉大さに気がついたのはわれわれの敬意に値する」ということを述べています。

#47
48

これは国立西洋美術館にあります。ロダンの「花子の頭部」です。

#49

ロダンが一番作りたかったのは、実は花子の演じた「死の顔」でした。先ほど歌舞伎についてのご講演がありました。花子は歌舞伎の一座でもなく、少女時代に踊りを習い芸者をしたことのある、演技にはど素人なのです。鷗外には、そういう素人が海外では、貞奴などよりも有名になっていたということについて、若干の違和感というものがあつたかもしれません。自らの腹に懐剣を突き付けて切腹するという、普通日本の女性が作法としてはまずやらない、そういう芝居を大好評をもって迎えられたということも、違和感となつたかもしれません。

その「死の顔」です。ここには造形的な、非常に興味深い表情があります。特にまなざし、こちらは、正面を向いていますけれども、もう一方はちよつと内斜視になっていて、見えを切る歌舞伎的なまなざしであることに気付かされます。

#50

ビゴーについてですけれども、ビゴーという人も日本に滞在しながら描いています。

#51

特に風刺として、三条実美の実際の顔と、ビゴーが描いた右側を比較していただくと、その風刺の意味がお分かりいただけると思います。

#52
#53

例えばこういう、非常に厳しい、痛烈な批評もあります。

#53
#54

しかしながら、穏やかな庶民の市井の人々の中に混じって、自然を描いているということもあります。

#56

それで、もう時間になりましたので、まとめます。今日、現生人類の全てはアフリカに起源して、亜種レベルほどの差ありません。

異人を表現した造形美術には、初めて接した画家や彫刻家の驚きと、そこにある見たこと

のない美の形を表現したいという素直な気持ちが表示されているように見えます。この肯定的な見方の一方、被宗主国側の人々からは否定的にも捉えられ得るといふ例もお話ししました。

#57
|58

自らの集団とは異なる点を誇張表現したり、自らと同化させる同質化の表現など、差異に対して、好奇心を持って、子細で丁寧な描写をしていると。そして、画家や彫刻家のまなざしには、描かれる人に対する共感、深い洞察が感じられるものが多いと思います。表現された異人との出会い、多くの場合それは、個人と個人の出会いであるということだと思います。ご清聴ありがとうございました。

(床呂) 宮永先生、大変興味深いお話をどうもありがとうございました。

それでは同じように、お一方ぐらいどうぞ。

(高島) ありがとうございます。A A研の高島と申しますけれども、私はインドについてやっております、先ほどの内膳の絵の中で、水夫はインド系の人であって、アフリカ系ではないのではないかと思うのですけれども、そのあたりは描き分けられているのではないかという気がするのですけれども。

(宮永) なるほど。すみません。私は一口にアフリカ系と言ってしまいましたけれども、東インド会社をはじめ、南アジアの貿易の方がむしろ多く日本に入ってきたということがあるかと思えます。当時は太平洋はほとんど航路はありませんでしたね。ちよつと私の方で、言葉が足りなかつたかと思えます。ありがとうございます。

(高島) ありがとうございます。

(床呂) よろしいでしょうか。あとお一人ぐらい、手短にお願ひします。

(山口) 中央大学の山口です。大変興味深いご発表、ありがとうございます。

多分、パワーポイントの終わりに書かれているところに、ちょっとお話しできなかったところがあるかと思うのですけれども、「誇張表現」と「同質化」の表現の対立が面白いと思います。それぞれの描き手が見過ごししてきたものかもしれませんが、何が異質の誇張になり、あるいは自分と同質のものを描き入れたりすることになるのか、何がそれに関わっているのでしょうか。

(宮永) それぞれの作例からいうと、やはり同質化については、よく知らないということ、自分と同じではないかというふうに見てしまっているというところが多分にあると思います。調査したくても、鎖国下ではできない。そういう物理的な制約があたりかと思えますけれども、やはり十分な情報がないというところで、同質化させてしまうということが起こっているかなと思います。

(山口) その逆が、いろいろ知っていたら、誇張の方に行くこともあるだろうし、でも誇張まで行かないこともあるということですかね。

(宮永) やはり南蛮とか紅毛という言い方をする事自体に、エスニックアイデンティティというのか、自民族優位主義というか、もちろんそういうところもあると思うのです。そのコンフリクトというのは、ご指摘のように大変興味深いものだと思います。ちょっと今すぐにはお答えできなくて、ごめんなさい。

(山口) ありがとうございます。

(床呂) どうもありがとうございます。宮永先生のお話は、もしかしたら第2部のトランスカルチャーを考えるとというセッションにも、非常にヒントになるお話であったのではないかと思います。改めて、ありがとうございます。

プログラム上、軽く休憩を考えていたのですが、申し訳ありません。私の仕切りが悪くて、

若干時間が押し気味ですので、もしよろしければ、このまま三人目の橋彌先生のご発表で第一部は一応終了ということになりますので、その第一部終了で、いったん区切りのいいところで、休憩という形にさせていただいてよろしいでしょうか。

それでは、第一部、前半の最後のご発表者ということになりますけれども、九州大学の橋彌先生からご発表を頂きたいと思います。橋彌先生は、ディシプリンとしては心理学、進化心理学等ということになるかと思いますが、先ほどのディスカッションにもありましたけれども、人類学の研究にも大変お詳しいということ、分野を超えた多岐にわたる内容になるのではないかとふうに思います。

それでは、「ウチとソトを分かつ顔・つなぐ顔―その進化と発達」というタイトルで、九州大学の橋彌先生からご報告をお願いしたいと思います。それではよろしくお願いします。

「ウチとソトを分かっ顔・つなぐ顔―その進化と発達」

橋 彌 和 秀（九州大学）

床呂先生、ご紹介をありがとうございます。橋彌と申します。よろしくお願ひします。

#1

このようなタイトルでお話をさせていただくことにしているのですけれども、「ウチとソト」というときに、ちょうど今、宮永先生がお話しされていた、それこそ集団というのをどういうふうに捉えるかということも、私自身、興味があるところではあるのですが、床呂先生から「進化の視点からの話を」というリクエストも頂いていますので、少しテーマを絞りたいと思います。

#2

「ウチとソト」と言うときに、私がイメージしていたのは、内集団、外集団というところの「ウチとソト」という面もたしかにあったのですが、もう一つは個体の内面と外面、心理学者でもありますので、心と体というか、その表面というところについて、今回はお話をさせていただければと思っています。

#3

私自身は今、メインは赤ちゃんの研究をしています。大体、乳児から、今ちよつと年齢が上がってきて六〜八歳くらいまでの子どもさんを対象に、実験心理学的な研究をしているの



ですが、そもそもなぜ赤ちゃんの研究をやっているのかというと生物学的な基盤に興味があるからです。しかしもちろん、文化とか社会的学習ということも見なければ、ヒトというのは分からないわけで、その相互作用を見ていく上で、赤ちゃんを見れば単純だということでは全然ないのですが、それをある程度はリバースエンジニアリング的に検証できるのではな
いか。そのときに、一つの枠組みとして、進化、自然淘汰の理論を据えてみたいと。ヒトとか人間とか社会を冷静に見据えるときに、その一つの手掛かりとして、こういう自然科学的な研究方法というのがあるだろうというふうに考えています。

4

ヒトという生き物が特別かということ、特別です。チンパンジーやミミズやコウモリが特別なのと同じような意味で特別なのですけれども、問題はこういうふうに特別なのかということとです。この問いを比較研究したりもしながらアプローチしていますし、もう一つ、その発達というのもメインに据えている。

5-6

英語だと「human」と書きますけれども、ご案内のように、日本語で書くと「人間」と書いたり、平仮名でも書きますけれども、片仮名の「ヒト」というふうに書く場合もあります。

7

大概、「人間」と書く場合は、文化とか社会的な側面を強調することになりますし、「ヒト」と書くと、生物学的なホモ・サピエンスとしての側面というのを強調するようになります。

8-9

発達というところから見ると、では、われわれは片仮名の「ヒト」から漢字の「人」になっていくことになるかという、きつとそうではないわけです。ここ20年くらいの実験発達心理学の知見が明らかにしてきたのは、ヒト、ホモ・サピエンスという生き物は、生まれた時点で、もしかしたらそれ以前から、文化、社会的な存在であるということです。つまり、「片仮名から漢字」というわけではなくて、もう最初から、「ヒト」という「片仮名の存在」は人間という「漢字の存在」でもあり得るということ。相互の要素は独立したものではありませんということです。

10

そうすると、その赤ちゃんというのを見ることで、ある意味の時間をさかのぼる訳ではないですけども、リバースエンジニアリング的なアプローチというのが可能だろうと考えられます。

11

こういうことを、この個体と環境の相互作用というのをもともと最初に考えたのは、チャールズ・ダーウィンです。一八五九年の『種の起源』にさかのぼることができて、その彼が提唱した自然淘汰という理論の枠組みの中で、われわれはいろいろな研究ができています。彼の手の上に今もいるような感じもするのです。

12

けれども、二十世紀の生物学というのは何もしてこなかったのかというと、そんなことは

なくて、二十世紀の自然淘汰理論というのは、恐らくインタラククション、個体間の相互作用や、心というものの、そのものの進化を研究の射程に捉えることを、これは方法論的にも理論的にも可能にしています。恐らく二十一世紀に入ったくらいの時点で、ほぼツールがそろったかなというところにいると思います。

#13

例えば道德だったり、協力だったり、共感であったりというものも、自然科学的な研究のそ上に乗せることができる地点に、われわれはいるのだと思います。

#14

まとめると、これは数年前の「猿の惑星」なのですけれども、フライヤーに、「心も、進化した。」となかなかすごいコピーだなと思ったのですけれども、そうですねとしか言いようがない。言い換えると、ハードウェアとして体や顔が進化の産物であるのと同じく、心というのはソフトウェアなわけです。ソフトウェアがどのように進化したのかということを考えることができるし、これからの研究の対象となり得るということだと思っています。

#15

心、心と言っていますけれども、心とは何か。生物学的に考えるならどういふソフトウェアかという、外界の情報を統合的にまとめ上げるような、内的な情報処理システムのことを、心と呼びましょう。知覚とか認知だけでなく、思考であったり、意図であったり、感情であったり、あるいは幻覚や妄想というものも、このシステムの一部なわけです。

16-17

ただ、ソフトウェアとはそういうものなのですけれども、目に見えません。自分の心も見えなければ、他者の心も見えない。個体は個別の生を生きている。にもかかわらず、われわれは別の人間同士が、一方でいとも簡単につながり合う。分かる気がしてしまうというような世界に生きているわけです。この心理バイアスの起源というのが、私自身の今の興味です。

18

その系列からいくと、ここはちょっと、今日はあまり触れませんが、David PremackとGuy Woodruffが一九七八年に「Theory of Mind」、心の理論という概念を提唱していますけれども、ある意味、彼らが最初に言っていた心の理論というのは、そういうことなのです。目に見えないのだけれども、心は「ある」こととして生きている。theoryというのは机上の空論とかという意味もあって、「It's only a theory.」と言ったら、「そんなの机上の空論じゃないか」みたいな話になりますよね。

Theory of Mindというのは、要するに、ofは同格で、「MindとどうTheory」を持ってわれわれは生きている。チンパンジーはどうだろうというのが、プレマックたちの問いだったわけです。

19

では、顔や身体に関してですけれども、これは今、公募班でやらせていただいている研究でも、一つの私たちのテーマになっているのですけれども、顔というのは恐らく、社会的な情報のプラットフォームとして機能している、そういうふうな適応的な背景を反映した存在であらうというものです。

#20

ソフトウェアとしての心と、プラットフォームとしての顔というのを、両側面から見ていく必要があるだろうと思います。例えば感情の進化、情動の進化というものと、表情の進化というものは、全然違うものですよ。内的な情報処理システムとして、つまり整合的に情報をまとめ上げる上で、感情というのが、適応的な装置とみなす進化心理学的な指摘の一方で、そのソフトウェアを表現する必要は、別にないわけです。

なぜ、それを表出しなければならないかということ、つまりシグナルとして表情がどのような意味を持つかというのは、別問題として考えなければいけないだろう。そもそも他者から、つまり他者の内的状態がどうであるかということを読み取るといふことには、恐らく、かなりの淘汰圧がかかるでしょう。しかしシグナルとしての表情というのは、例えばディスプレイとしてももちろん有効なわけですけども、そこには、シグナルですからそれが侵入してくる可能性が生じてくる。そのあたりのインタラクションというのを考える必要があると思います。

#21

ただこれは、今日の話に収めるは、私の手には余るので、今日はもうちょっと話を絞って視線の話をさせて頂きたいと思っています。

視線というものが、よくあまりに言われ過ぎて、何か言うのも嫌なのですけれども、「心の窓」とかよく言いますけれども、まあそうなのです。「ウチとソト」をどういうふうにつないでいるのか、どういうふうに分かっているのかということ、幾つかのわれわれの研究も含めてご紹介したいと思います。

#22

#23

James Gibson が Pick と共に、「一九六三年にこんなことを書いています。『The eyes not only look, but are looked at』。目は見るだけでなく、見られているということ。知覚心理学者のギブソンがこれを書いているというのは、やはり格好いいなと思うのですけれども。つまり、工学的な情報を処理する装置としてだけではなく、他者の目がどこかを見ているということは、われわれは推論するまでもなく、自動的に読み取ってしまうわけです。オステンシブに読み取ってしまうわけです。」

#24

信号出力装置としても、目というのは機能しているだろうということが分かります。

#25

目のことをいうときに、日本語だと「視線」というふうに当たり前のように言います。英語では gaze direction と言いますけれども、視線、つまり見る線 (Looking-line) というふうな言い方をするわけです。しかしこれを冷静に考えてみると、そこに線はないわけですよね。

#26

こういうふうにも目からビームが出ていたら、トビーなどは要らないのですけれども、残念ながらこういう世界にはわれわれは生きていなくて、実際に二十世紀くらいの心理学者だつたり研究者というのは、目から何か出ているのではないか、放射線が出ているのではないか

というので、実際にアメリカではパテントが取られていたりするのですけれども、それはちよつとおいておきましょう。

27

実際にはわれわれの知識の範囲では、目からビームが出ていて、それをわれわれが何か検出しているということはない。体の向きと、顔の向きと、眼球の向きを使って測量しているわけです。実在しない線を心理的に測量して、相手がどこを見ているのかというのを検出しているということになります。こんなことがどうやって可能なのだろうかということを考えてみる必要があるだろうと。

29
— 30

このときに、ちよつとクラシクなお話をしますけれども、例えばこのヒトが、見ている。見ている。見ている。見ている。見ている。スライドを行ったり来たりしているだけですけれども、分かりますよね。

31
— 32

では、こちらはどうぞでしょう。これは私の昔の同僚ですけれども、パンというチンパンジー。見ている。見ている。

33
— 34

これはアキラというとても人のいいチンパンジーですけれども、見ている。見ている。見ている。見ている。見ている。分からなくはない。

35
36

でも、最初のヒトの方が分かりやすい感じがしますよね。これは御存知の通り、白目の影響が大変大きい訳です。

37

ちなみに左上は、これは後でぜひお話を伺いたいですけれども、最近、眼球にタトゥーを入れるという人がいらつしゃるらしくて、入れるとやはり視線が分かりにくいですよ。一方で、真ん中のモノクロの写真は、ゴンベストリームという国立公園にいた、もう死んでしまいましたけれども、そのチンパンジーで、ミスター・ワーズルという名前で、この個体には「白目」がどうもあったのです。そうすると、どこを見ているのかもすごく分かりやすい。

38

この目の信号化と白目というのが関係あるのではないのかというのを、最初にかつちりと報告したのは一九九七年の『Nature』という雑誌に載った小林と幸島の仕事です。現生で二百種類ぐらいサルはいるのですけれども、その内の九十種類近くのサルの目を比べていきます。

39

目のパラメーター、ここはちよつと省略をしますが、白目だけではなくて、目の形というのも調べてみました。

そうすると、人というのは、他の霊長類と比べて、極端に横長、極端に露出した強膜を

持っている。強膜というのは、白目のところですが、なおかつ、その白目、強膜の部分に着色がない、種レベルの共通項として着色がないのはヒトだけであるということが分かったわけです。

#40

日本語の文献も幾つか出ていたので、もしご興味があればそれを見ていただいたり、あるいはオリジナルの論文を読んだだけでも分かるのですけれども、これは、目のバリエーションというのは、例えば体が大きいやつというのは強膜が露出しているということが、これはエネルギーコストの問題から説明がつくのですけれども、もう一つは目の形というのは、地上に住んでいるということと関係があるだろうと。つまり、樹上性の種というのは三次元空間で生きているので、水平のスキャンも大事だけれど垂直方向も大事なのです。一方で、地上に住んでいるヒトやヒビのような種というのは、どちらかというと水平方向のスキャンの方が、有用性が高いという生態学的背景への適応として考えられるのではないかとというのが、小林、幸島の考察のひとつです。

#41

その上で、白目というのは、例えば共同で狩りをしたり採集をしたりするときの、協力的行動を行うときのツール、コミュニケーションのシグナルを伝えるツールとして進化してきたのではないかとというふうな仮説を提示しています。これはいまでも多く、引用されている論文です。

#42

それをひきついでというか、実はヒトの目だけではなくて、目の形というのは社会的な要因の影響を受けて進化したのではないかということ、小林と私で二〇一一年に研究をしています。

#43

ヒトの目だけ白いというと、その白目の適応化とかいうのは、なかなか比較研究で説明していくというのが難しいのです。目の形というのがどうなのだろうということで、検討してみました。何をやったのかというと、社会的要因として、例えばこれはニコラス・ハンフリーの最初のソーシャルインテリジェンス仮説を踏まえたロビン・ダンバーの研究ですけれども、例えば *neocortex ratio*、大脳新皮質率と霊長類ごとの集団サイズというのが、正の相関を持っているということを、ダンバーたちは見つけてくるわけです。では、社会的要因と目の形に何か相関があるのであれば、目の形態と大脳新皮質率やグループサイズの間にも相関があるのではないかということで、調べてみました。

#44
#45

霊長類三十種について、目のパラメーター、小林が持っています。大脳新皮質率、既に論文が出ています。集団サイズ、出ています。コントロールとして、体サイズとか生息環境というのもぶち込んで相関を見てみると、非常にきれいに出てくるのが、大脳新皮質率も集団サイズも、目の形態と非常にきれいな相関を持っている。

#46

ちなみに、詳細は省略しますが、行動データも、要するにこの目の形と実際にどういふうに振る舞っているかというところも、きれいに相関をすることが分かりました。これ自体は例えば、実際に白目があるのはヒトだけ。逆に言うと、それ以外の種は、ここにメラニンの着色があるのですけれども、強膜が露出して横長の目をしていると、例えばちら見をしても分からない。分からないというか、検出が非常に難しい。先ほどのチンパンジーの目を思い出していただけるといいのですけれども。

つまりいわゆるマキャベリアン・インテリジェンス的なものを考えていただけるといいのですけれども、出し抜いたりというか、競争的な文脈の中で、眼球だけ動かせるようなデバイスを持っているというのは、有効なものではないか。それがヒトにおいては、むしろそれを目立たせるというか、眼球を目立たせることによって例えばあいさつであったり、ゲイズ・グルーミングというふうにわれわれは呼んでいるのですが、まなざしを交わすことで例えばあいさつをしたり、コミュニケーションのツールとして使うということのベネフィットが、その競合に勝つということのベネフィットが上回ったときに、こういう変異が集団内にひろまったのではないかというふうなことを考えています。

#47

そのときに関連してくるのが、先ほどの心の問題に少し戻りたいのですけれども、例えば、見る。何かわれわれが相手を見て、働きかける。これはすごく分かりやすいですよね。見ないで、何も起こらない。これも分かりやすい。見ないのだけれど、何かするというのは、これはサッカーのスルーパスとか、そういうときはありますけれども、よほど戦略的などきでないところなくて、問題は、見ているのだけれど、何もしないというときです。しばしばこ

ういうふうな、シグナルと行動の間に齟齬が生じるということが、シグナルが生まれてくると、起ります。見ているけれど何もしないというときに、われわれが計算するのは、この人はなぜ見ているのだろうか。つまり、その背景にある意図ということになるわけです。直接的な行為と独立した意図というものを発生させるといふか、生み出すに当たって、シグナルと行為の間の齟齬というものは、恐らく重要なことだろうというふうに考えています。

#48-50

こういうことを考えているのは私たちだけではなくて、例えばトマセロなどは *cooperative eye* という仮説を二〇〇七年に出しています。ヒトだけが視線にもすごく感受性が高いと。チンパンジーとかボノボ、ゴリラの場合は、顔向きに依存して視線を追従するのだけでも、ヒトの場合は視線に、眼球運動に依存しますねというふうな話のベースから、ヒトの眼球方向依存には、ヒトの目が協力的関係の維持に貢献することを反映しているのではないかと、こういうことを言っています。

この話が面白いのは、受信者からのアプローチを取っているということです。全ての種についてヒトが実験者なのですけれども、つまり、ヒトの目が目立っているから、みんな視線を追い掛けるかという、そうではない。ヒトの目をどういうふうに受け止めるかということも、考える必要があるだろうということを、彼らの仕事は示してくれます。

#51

というわけで、でもないのですけれども、われわれもやってみています。実際に赤ちゃんの研究をしてみても、赤ちゃんが自分を見つめる目というのを、どういうふうに受け止めているのか。もちろん、視線に対する反応というものは、それこそ *Teresa Farroni* だったり、千住

さんだったり、いろいろな人が仕事をしているわけですけども、これが他者のゲイズに対する反応ではなくて、それ自体の intrinsic (内的) な意味というものが何かあったりしないのだろうかというので、ちよつと実験を試みました。

#52
—53

映像を見ていただくのが一番早いと思うのですが、この装置、ひもを引つ張ると、目の前のガラスが透明になって、お姉さんが出てくるのです。お姉さんが出てきて、三秒間遊んでくれます。しかし、一つの状況では、そのお姉さんは赤ちゃんと目を合わせている。もう一つの状況では、目は二十度ずれていて、つまり同じように遊んでくれるのだけど、目が合わないというふうなシチュエーションを設定しました。

これは合っている状態なのでですけども。

—映像—

#54
—58

学習がものすごく早い。三分間の間に、ひも引き回数というのは、優位に一分、二分、三分と上昇します。ガラスが透明になっている時間と、ひも引き回数と両方を取っているのですけれども、上がります。それに対して、例えば最初の三分は合っていたのだけでも、後で合わなくなると、ひもを引くのは下がっていく。消去が掛かるようなことが起こるわけです。

57

しかしこういうのは、真顔でやると出ません。

58

あるいは、顔がずれていて、目だけが合うということをやっても出ません。つまり、顔も向いていて、目も向いていて、笑顔だと、それは報酬として作用するということが、この実験から示せるわけです。

59
60

六〇七カ月で既に、頭部方向と一致した笑顔付きの見つめる視線が、感覺性強化子として機能し得る。しかし、これが遺伝的に備わっているとかが言うつもりはなくて、恐らくこれは発達的に考えていかなければいけない。

61

最初、生まれたばかりの赤ちゃんというのは、例えば自分の方を向いている顔を追尾するということは恐らくやっつけているわけで、実際に見えているのは、こんなふう（左上）にきつと見えているわけですけども、ほんやり見えていても、この顔らしきものを追い掛けるというシステムについては、それこそ山口先生や金沢先生がお詳しいと思いますけれども。

こういうスターターキットがあればあるとすれば、それをもって、それを前提としつつ、その顔があるときには、例えばおっぱいをもらえたりとか、オムツを替えてもらえたりということがあるわけです。そうすると、そこに引っ付いている、見つめる視線には親和的な意味が形成されるだろうと。

これはプレマックの原理というもので、もしかしたら説明できるかなと思って今、論文を直しているところなのですけれども、見つめる視線が強化子として、報酬として機能するようになる。そうすると何がいかというと、見つめる視線を手掛かりとして、つまり毎回、褒められたり、怒られたりしなくても、注目されるとか、笑ってもらえとかいうのが、手掛かりとして、さまざまな社会的言語に限らず、社会的な規範であったり、行動様式であったりというものを獲得するツールとなっていくだろうというふうに考えています。そのときに、そのシグナルとしての目というものも、恐らく機能してくるだろう。これがヒトのまなざしをめぐる発達の中で、一つ重要なことなのかなと思っています。

#62

見ていないことというのにも恐らく意味があるだろうというふうな研究も実際にやっています。これはもう既にパブリッシユされた研究ですけれども、今、京都大学にいる孟憲巍さんと一緒にやった一連の研究ですが、これだけ一瞬見ましようか。

#63

赤ちゃんの後ろからおもちゃが出てくるのですけれども、そうすると、結構見た後で指さすのです。

#64
#67

指さしているのは何かというと、片方のおもちゃは、この目の前のお姉さんと一緒に遊んだことがあるおもちゃです。もう一つは、一人で遊んだおもちゃ、つまりお姉さんがいないときに遊んだおもちゃ。そうすると、お姉さんがいないときに出てきたおもちゃの方を指さ

すというふうなことが分かりました。それだけだと、一人で遊んだときのおもちゃを指しているのではないのかという話になるのですけれども、目の前の人をちよつと代わつてもらつて、どちらのおもちゃでも遊んでいない、別の親しいお姉さんにすると、指さしの傾向は消えるのです。つまり、目の前に誰がいるかによつて、その人が気付いていない、後ろのおもちゃのどちらを指さすかというふうなことを決めていくというか、相手の認識論的な状態を認知した上で、1歳半の子どもが指さしで、頼まれもしないのに教えるという傾向を持つているということが、こういう研究から分かるわけです。

#68
72

#73
「つなぐ」の話だけをしましたけれども、「つなぐ」というのと「分かつ」というのは、結構、表裏一体のところがあるわけです。シグナルが進化すると、そこには必ず、うそが侵入してきます。うそに対する対抗戦略というものも出てくる中で、「絆」とか「つなぐ」とかいうと何かいい話っぽいですがけれども、それは分断と表裏一体のものとして考える必要があるだろうと。

例えば顔や視線に対する、あるいは表情の不自然さに対する非常に高い感受性であったり、あるいはマルチモーダルなシグナル、つまり視線だけではなく、それに付いている表情であったり、そのタイムコースであったりというものを使うことによつて、われわれはこの「分かつ」こと、分かつ力に対しても抵抗しているような存在であるというふうに見えることができるわけです。

#74

ギブソンのところから入りましたけれども、目というのは、見るだけではなくて見られている。それだけではなくて、少なくとも人の目というのは見せている、見せる目としての人の目という話でした。

#74

共同研究者を御紹介します。どうもありがとうございました。

(床呂) 橋彌さん、どうもありがとうございました。私のような、心理学の門外漢の者が聞いても、非常に分かりやすく、クリアに研究内容をまとめていただいたと思います。

それでは、またご質問をお受けしたいと思います。いかがでしょうか。

(吉田ゆか子) ありがとうございます。AA研の吉田と申します。

ちょっと聞きそびれたところを聞きたいのですけれども、見ているけれど見ていないときがあつて、その話とGregory Batesonのフレームの話のつながりのところですが。

(橋彌) Batesonのフレームは、遊びの話をしたかったのですけれども、あのときに出てくるのは、Batesonは、例えばイヌだったりサルだったり、バージョンを見ると出てきますけれども、かんでいるけれど、かんでいないという両義性が、遊びであるというメタシグナルになり得るとい話がありますよね。

要するに、「見ているけれども何もしない」というのは、つまり見るといふシグナルと、その行為の間に齟齬が生じるという意味で、引用していたのです。見るといふのは何かの行為としばしば結び付くわけですが、実際にはこれがシグナルである以上、実際の行為とは乖離が生じる可能性があるわけです。という意味で、「かんでいるけれど、かんで

主要参考文献

- Hashiya, K., Meng, X., Uto, Y., & Tajiri, K. (2019). Overt congruent facial reaction to dynamic emotional expressions in 9–10-month-old infants. *Infant Behavior and Development*, 54, 48–56.
- Meng X, Uto Y, Hashiya K (2017) Observing Third-Party Attentional Relationships Affects Infants' Gaze Following: An Eye-Tracking Study. *Front. Psychol.* 7:2065.
- Meng X & Hashiya K (2014) Pointing Behavior in Infants Reflects the Communication Partner's Attentional and Knowledge States: A Possible Case of Spontaneous Informing. *PLoS ONE*. 9(9): e107579.
- Kobayashi H & Hashiya K (2011). The gaze that grooms: contribution of social factors to the evolution of primate eye morphology. *Evolution & Human Behavior*. 32. 157–165.
- 橋彌和秀 (2017) 『ギャバガイ！「動物のことば」の先にあるもの』。(訳) 勁草書房。(Premack, D. (1986). GAVAGAI: Or the Future History of the Animal Language Controversy.)
- 橋彌和秀 (2016) まなざしの進化と発達。子安増生 譯次敬 (編著) 『心の理論—第2世代の研究へ』。pp.27–38. 新曜社。
- 橋彌和秀 (2015) こころというセオリー：あるいは、Theory of Mind ふたたび 木村大治 (編著) 『動物と出会うⅡ心と社会の生成』 ナカニシヤ出版。pp77–83.
- 橋彌和秀 (2013) 『ヒトはなぜ協力するのか』。(訳) 勁草書房。(Tomasello, M. (2009). Why we cooperate. The MIT Press.)

いない」というのが、このストーリーをまとめる上でバックグラウンドになっていたので、Batesonを引用していた次第です。

(床呂) よろしいですか。他の方。一番後ろで手を上げている方。

(西井) A A研の西井と申します。とても面白い話をありがとうございます。視線のところで、視線というのは、顔の向きと目の向きで測量していて、どこを見ているのかわかるとおっしゃったのですが、例えば後ろから視線を感じて、振り返って見ると実際に見られていた、そういうことが実際にあるような気がするのですけれども、それはどういふふうなことでしょうか。

(橋彌) 結論から申し上げますと、それは誤解です。まさに二十世紀の頭にパテントを取った人たちは、それが背景にあったのです。つまり、視線を感じるというのは、きっと何かがあるのだと。放射線が何かが出ているのではないかと。当時は、放射線というのは最先端だったわけです。それで、パテントだけは取ったのですけれども、放射線は出ていないわけで、それはだから判断バイアスというか、何か感じたような気がして振り向いても何もなかった場合は、私たちは覚えていないわけです。でも、実際に何かあると「やっぱり」といふふうに、ポイントが上がる。つまり、マイナスポイントは付かないで、プラスポイントだけ付いていくというふうな判断バイアスが、今おっしゃったようなものにつながっているのではないかと、つまらない答えをしてしまつて申し訳ありません。

(床呂) よろしいですか。今ちょうど質問した二人は、二人ともA A研の人類学班のメンバーの者ですけれども、橋彌先生のお話は、もちろん心理学の話ではあるのですが、先ほどのBatesonにしても人類学者でもあり、橋彌先生のお話でも人類学者が聞いても非常に触発されるだろうなど。面白いお話だったと思います。

一つ前に質問した吉田ゆか子さんは、ご存じかと思えますけれども、バリ島で舞踊の研究

をしていただいています。あそこも本当に、舞踊において視線の向きを強調するといえますか。

(橋彌) 白目に色は付けませんでしたっけ？ インドとかだと、ケシか何かを入れて、強膜を赤くしたりとかありますけれども。

(吉田ゆか子) バリはつけません。

(橋彌) ああ、そうですね。ありがとうございます。

(床呂) それから、すみません。私も一つ質問というかコメントというか、先生の話をサポートする意味で、一つは質問なのですけれども。

先生の進化の話で思ったのは、霊長類の中で、白目が、人間が発達していて、それがコミュニケーションのツールというのは、非常に説得的なお話だと思えますけれども、それをさらに強調するロールとして、眉毛も、霊長類の中で、ちよつと私は専門家ではないので、間違いがあったら指摘していただきたいのですけれども、恐らくホモサピエンスが一番、少なくとも発達しているのではないかという気がするのです。

それも眉毛って、非常にあれではないですか。ひよつとしたら視線のコントローラや強調であって、それが場合によっては文化の話とちよつと唐突に結び付けてしまうのですが、日本の昔の化粧のときには、眉毛をむしろ落とすとかで、逆に表情の表出をむしろ抑えるために眉毛を剃るとか、今やったら逆に不気味な表情が誇張されてしまうかもしれないですけれども、そういうことをちよつとお話して。

一つ質問は、白目のあれでいうと、霊長類内部ではすぐ分かったのですが、イヌなどは若干白目が、ヒトほどといわれるときもあります。あれなどは今日のお話ではどういうふうなところに位置付けられるのかという質問です。

(橋彌) イヌというのはなかなか難しく、認知能力とか視線認知に関しても、例えばチン

パンジーでは絶対にやらないようなことを、イヌはとてもよくやる。例えば視線に対する感受性が非常に高かったり、指さしを理解したりということ。ただ、これはドメステイケーション、つまり家畜化の歴史がものすごく長いのです。今、家畜の研究は、ある意味ものすごく熱くて、イヌとネコと、ウマだったり、北大の瀧本さんや、京大の山本さんなどがされています。それから最近、私が個人的に來ているなどというのが、ヤギの研究です。ヤギも結構面白い研究があります。

眉については、またちよつと時間もあれですね。眉についてはとても、最近、眉の進化に関する研究は、確かつい最近、先月くらいに一本出たとも思うのですけれども、私もちよつとこれを押さえておかなければと思つて見つつ、まだすみませんがきちんとフォローしていません。

眉と、今のその文化的なところで面白いと思つたのは、逆にいうと、「剃つても大丈夫」ということです。例えば床呂さんもご経験あると思いますけれども、アフリカで道を歩いていると、アイブロウフラッシュユつて、ふつと眉を上げるときに。でも、あれは眉が大事なのではなくて、白目がものすごく強調されますね。「あいさつされている」という感じがするわけですけれども、アイブロウフラッシュのときにも多分、かなり信号化として高いのは白目かなと。眉がコミュニケーションシグナルなのかというところとして、どの程度利用しているかというのは、それこそ金沢先生の研究などもありますし、そのあたりはまた議論させていただければと思います。ありがとうございます。

(床呂) どうもありがとうございます。個人的にもまだまだお聞きしたいことはあるのですが、この後また第二部も控えておりますので、これで一応、橋彌先生のご報告と質疑のセッションは終わりということにさせていただきますと思います。橋彌先生、どうもありがとうございました。

Ⅳ 第二部 トランスカルチャー状況をめぐって

(床呂) お待たせしました。時間になりましたので、本日のシンポジウムの後半、第二部「トランスカルチャー状況をめぐって」と題しまして、最初にも申し上げましたとおり、われわれの活動のキーワードでもあるトランスカルチャー状況とは何か、どういうことかという問題をめぐって、集中的にディスカッションを行いたいと思います。

進め方ですけれども、お手元にプログラムのある方はご参照いただければと思います。最初に、京都市立芸術大学芸術資源研究センターの佐藤知久先生の方から、問題提起的なご発表を頂きまして、休憩を挟んで科研の計画班の河野先生、金沢先生のお二人からコメントを頂く。そういう運びにさせていただきますと思います。

最初に問題提起を頂く佐藤先生ですけれども、実は科研の、いわゆるオフィシャルなメンバーではありません。今年、弘前であった文化人類学会で、科研の高橋康介先生の班を中心としたセッションを組ませていただいたのですけれども、そこにも聴衆としてご参加いただきました。その後、飲みながら非常に長くお話しさせていただいて、今日につながったというような舞台裏もあります。佐藤先生は、ディシプリンとしては人類学ですけれども、分野の垣根を越えて、例えば芸術的な実践、アートをめぐる活動などにも非常に詳しく、半分、当事者のような形で関わっていらつしゃるといふことになります。

それでは、時間もありませんので、佐藤先生の方から問題提起的なプレゼンテーションを頂ければと思います。タイトルは「魂／機械／知性―トランスカルチャー状況とハイブリッド化をめぐる人類学的考察」ということで、ご準備はよろしいでしょうか。

「魂／機械／知性―トランスカルチャー状況とハイブリッド化をめぐる 人類学的考察」

佐藤 知久（京都市立芸術大学芸術資源研究センター）

床呂さん、ご紹介ありがとうございます。今日は、トランスカルチャー状況というのは、
どういうことなのかということについて考えたことをベースにお話ししたいと思います。

#1

今、床呂先生がご紹介してくださったように、私はこの研究班のメンバーではないのです
が、なぜここに呼ばれたのかということと考えると、一つは、私が人類学者としてAA研の
研究会に出ている、床呂先生とも一緒にいたこともあると思うのです。けれども、何よ
りも金沢創と私が、大学時代に同じクラスだったのでね。勝手に想像するに、恐らく「ト
ランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」という研究プロジェクトも、私と金沢創
が議論していたときの状況のようなもの、つまり人類学と心理学の対話を背景にもつので
ないかと思います。

#2

この研究プロジェクトの前提としてあることというのを少し考えたいのですが、この前の
橋彌先生のご発表の中にもありましたけれど、人間の生物学的な基盤と文化的・社会的なも
の、学習によって身に付くものと生得的に備えているものという区分が、心理学と人類学と
か、サイエンスとヒューマニティーズの棲み分けを可能にし、両者の研究をそれぞれ成り立

#1

2018年11月25日 トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 東京外国語大学AA棟303

魂／機械／知性

トランスカルチャー状況とハイブリッド化をめぐる人類学的考察

佐藤知久
京都市立芸術大学
芸術資源研究センター



芸術学

#2

トランスカルチャー状況における顔身体学

普遍性：生物学的基盤（生得） ←→ 個別性：文化的・社会的次元（学習）

science? humanities?

トランスカルチャー状況においては、
この棲み分け・カップリングが、成り立ちにくい？

たせている。そして、それぞれの成果を持ち寄ることが、今のアカデミアの基本性質ではない。そういう状況の中で、それを持ち寄って、こうという発想がベースにあると思うのです。ただ私は、トランスカルチャー状況においては、このカップリングが、うまく行かなくなりつつあるのではないかと気がしています。つまり文化的・社会的なものというのを一つの形で記述しにくくなるというか、最初の床呂先生のお話にもあったのですけれど、多くの人が、例えばスマートフォンを使っているという意味では、文化的な差異のようなものは一見ないように見えるのですが、その一方では恐ろしく差異があるとも言えるわけです。結局、「それはあなたの生きてきた人生によるものの見方だ」という感じで、傍から見れば同じような集団に見える人の中にも、非常に大きな対立がある。生物学的な基盤と文化的な次元を、対立するものとして、切り分けにくくなっているのではないかと思います。

3

それが、どういうことなのかを考えるのが、トランスカルチャー状況とは何かということになると思うのですけれど、今日の話の内容としては、トランスカルチャー状況とは何かということをお話しした後には、そこから考えられる研究にはどんなものがあるのかということをつたつ方向性から考えてみたいと思います。

4

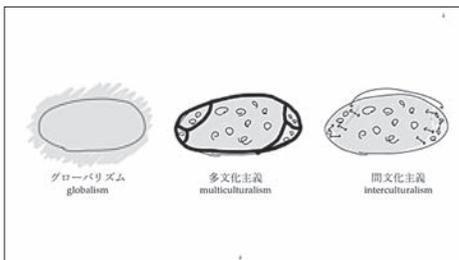
はじめに、トランスカルチャー状況というか、トランスカルチュラルな状況について考える前に、その言葉以前にあった文化についての私たちの考え方を整理したいと思います。図をご覧ください。

一番左はグローバリズムです。この丸い面をある社会や国のようなものとして考えてくだ

3

内容	
①	トランスカルチャー状況について
②	トランスカルチャー状況における研究のふたつの方向性
1)	ハイブリッド化の線
2)	トランスカルチャー状況のフィールドワーク (身体/世界、感覚/アートの線)

4



さい。グローバリズムというのは世界中がある種、均質な文化によって覆いつくされている。マクドナルド化する社会のようなものです。

真ん中の多文化主義というのは、それに対する批判として、一つの社会の中に幾つもの文化集団というか、人間としてみれば文化集団ですし、行動の体系のようなもの、あるいは記号の体系のようなものとして考えれば文化システムですけれども、それが共存している。別々のシステムが共存しているという考え方です。

最後に、インターカルチュラリズムです。これは比較的最近用いられるようになった言葉で、多文化主義的な状態を前提としつつ、それではお互いの間に壁のようなものがあって、一見、共生しているけれども、それぞれの殻に閉じこもっているところもあるので、お互いの交流を促進しようというのが、インターカルチュラリズムです。

#5

グローバリズムというのは、ある均質な文化が世界規模で広がっていくという考え。多文化主義というのは、異なる文化集団が、ある一つの社会や国、もつといえれば世界レベルで地球上に並存しているという考え方です。

ただし、最近日本でも多文化共生という言葉がよく使われますが、私が思うにそれは多文化主義とは微妙に違って、文化的多元主義と言った方がいいのではないかと思います。多文化主義社会というのは、例えばその国の法的な言語というのも複数設定するわけです。しかし、日本で多文化共生というと、日本の公用語を日本語以外に設定しようというような議論は全然なくて、とりあえず日本語をしゃべってくれる人たちになつてくれたら受け入れますというように、公的なカルチャーは一つで、私的な領域ではいろいろあってもいいですよと。これは文化的多元主義と呼ばれるものに近いのではないかと思います。

#5

① トランスカルチャー状況について..グローバリズム、多文化主義、間文化主義

- ・ グローバリズム globalism : ある均質な文化が、世界規模で広がる
- ・ 多文化主義 multiculturalism : 異なる文化集団の共存 公的領域も複数文化のルールに則る
- ・ cf. 文化的多元主義 cultural pluralism : 公的文化は思想、私的文化は複数いゝゆる「多文化共生」
- ・ 間文化主義 interculturalism : 異なる文化集団の存在と交流
- ・ 語*の文化集団の文化的多様性を尊重しつつ、それぞれの文化にひきこもることなく各文化間の相互理解や対話を促進しようとする

→ 「文化間の差異だけでなく類似性にも関心をもち、絶対的な相対主義やポストモダニズムなどに陥らないよう努力、交際しよう」

いずれにせよ、トランスカルチャーという言葉が出てくる前にあった考え方というのは、ある集団と、その集団の人たちが身につけている学習した行為や、記号システムとしての文化システムを基本的には一体のものと考えて、その間の交流をするとか、それぞれの文化には等しい地位があるとか、そういうものだったと思うのです。

ところが、そういう多文化主義というものが、実際に具体的、政治的な制度や仕組みとして動いてくると、それが全くというくらい違うかもしれないませんが、あまりうまく行くことばかりではないということが指摘されるようになってきたのが、早いところと言うと一九八〇年代で、本格的に学問的な世界の中で論じられるようになってくるのが二〇〇〇年代だと思います。

6

私の今日の議論は、ロシアの文化研究者 Mikhail Epstein と「う」人の「Transculture」という論文に多くを負っていますけれども[※]、この Epstein という人は、多文化主義とか間文化主義というのは、結局のところ人間を、その人が生まれ落ちた文化の中に閉じ込めるものだという言い方をするのです。

例えば私は日本語話者である両親の下に生まれたわけですけども、私がその後、どこか違う所に行ったりして、日本語がどんどん下手になっていって、他の言語の方がうまくなるような「可塑性」というものが、人間にはある。ところが、多文化主義的な考え方や間文化主義的な考え方では、基本的にオリジンにあるカルチャーをすごく重視して、それがずっと継承され、保護されていくことをよしと考えるところがあります。しかし、それをよしと考える人ばかりではないのかと Epstein は言うのです。だから、Epstein は、カルチャーというものが、ある種新しい牢獄になっているとか、多文化主義というのは、実はい

6

① トランスカルチャー状況について…多文化主義批判

- “Cosmization of one globally homogeneous culture over many” or “cosmization of each culture within itself?” (Epstein 2008)
- 「多文化主義の哲学は、さまざまな文化のあいだにある古い弊習を破壊するかわりに、新しい型を打ち立てている」(同:336)。「熱狂されたアパルトヘイト」「胡散臭いゾロバガンダ」も
- 多文化主義・間文化主義のどちらも、「多数者」や「征服者」の文化も等しい価値をもつものとして肯定。征服や支配を正当化するロジックにながかりかわらない
- 事例：カナダの先住民サーニッチ
- 多文化主義政策は、「国家権力を背景に政策や価値観や言語を先住民に押し付けているという点で、それ以前の排同政策や同化政策の延長線上に存在」(同頁 2016: 517)
- 母語を失い、生活も多様化しているが、かれらが「先住民」であり続けているのは、「『征服者の記憶と『イメージ』』の共有、相変わらず続く主義社会の支配的政治状況」(同頁 2016: 517) のため

Epstein, Mikhail 2009 Transculture. American Journal of Economics and Sociology 68(1). Wiley/Blackwell (10.1111). 327-351.
原丸一 著 2016 多文化主義という夢か。文化人類学 6(2)。日本文化人類学会 304-321.

※ Epstein, Mikhail (2009) "Transculture". American Journal of Economics and Sociology 68(1): 327-351.

ろいろな文化の共生を主張するように見えて、その間に壁をつくっているということを書きわけです。

この議論は、文化人類学の中では一九九〇年代ぐらいから論じられていました。文化という概念が、実は新しいアパルトヘイトを生むツールになっているのではないかという議論です。それぞれの文化を保護することを建前に、実際には、例えば民族集団や、いわゆる人種間の棲み分けや社会的階層を切り分けていくようなことにつながるのではないかという議論ですね。

それゆえ Epstein は、例えば北米、カナダやアメリカ合衆国のような国は、元々、先住民がいた所にヨーロッパ人が入ってくるという歴史を持つているわけですけども、多文化主義がそこで先住民の文化を保護するのは当然ですが、逆に征服者の文化も保護するわけだから、結局、征服者の文化も、それはそれで価値があるものだという形で、征服を正当化するロジックであると言っています。

実際に一昨年、渥美一弥さんという方が、カナダの最近の先住民文化の様子について書かれた論文[※]を、文化人類学会誌に発表しています。それを読むと、カナダというのは多文化主義法を一九八八年に制定して、多文化主義を国家レベルの政策として推進している。渥美さんはそこで、昔ならエスキモーといわれる、さまざまな小さな先住民集団の一つサーニッチという所の調査を、何十年もされている。そのサーニッチの人たちが今置かれている状況を見ると、基本的には生活保護を受けて暮らしている人が多い。しばしば言われることですが、保護することの実情が生活保護を与えることになつて。そこである程度自立して暮らしている人というのは、先住民の言葉の先生とアーティストだけなのだそうです。アーティストは、いわゆるアボリジニ・アートやネイティブ・アメリカン・アートのような芸術的な領域で、すごく伝統的なモチーフなどを使ったデザインや作品を使って売っている。そ

※渥美一弥（二〇一六）「多文化主義という暴力」
『文化人類学』八一（三）：五〇四―五二二

れと先住民の文化を先住民の子どもたちに教える教師だけが、ある意味食える職業で、それ以外には社会で最底辺の労働しかできておらず、生活保護を受けている人が多いというのです。

これは元々、一九八〇年代に多文化主義の方向に政策転換する以前に、サーニツチの人たちに加えられていた文字通りの抹消政策、死んでいくことをそのままにしておくような政策や、主に英語使用者の、カナダの心理文化に同化するような政策の延長線上に存在する、もう一つの新しい押し付けではないか。多文化主義政策自体が、「あなたたちの文化を守りなさい」とか「あなたたちの文化を大事にしなさい」と政策的に押し付けている。押しつけてあるという意味では、それらと変わらないのではないか。

しかし一方で、サーニツチの人たちは、押し付けられた多文化主義政策を、ある意味で受け入れているようにも見える。つまり、自分たちをネイティブな先住民として、自分たちの民族集団や民族文化のようなものを継承していこうということもしている。けれども、今かれらを結びつけているのは、過去にあったサーニツチの人たちに対して加えられた悲劇的記憶、イメージを共有しているという記憶と、今でも続いている主流社会の支配的・政治的状況、つまり彼らをマイナーな文化集団として位置付けて保護しようという力なのだと思います。

こういう状況を見ると、多文化主義というのが、決してうまくいくようなものではないことが、よく分かると思うのです。もう少し複雑なことが進んでいると思います。

#7

そこでトランスカルチャーという言葉が出てきます。この言葉が非常に早く現れてくるのもカナダではないかと思えます。『Vice Versa』というケベック州モンリオールで作られ

#7

① トランスカルチャー状況について
—マイノリティがひろく文化的社会運動としてのトランスカルチュラルイズム

◆ “Vice Versa”

- ◆ 1983年、モンリオール（ケベック州）のイタリア系移民たちを中心に生まれた “Magazine transculturel”
- ◆ フランス語、英語、イタリア語で執筆
- ◆ 「私たちは空間とは何かを定義したいのではない、空間がわれわれの社会にとって重要な交差点なのだとことを確認するため、その交差点のような（空）をしようとしたのだ。このプロジェクトが成功するには、それゆえ、読者による貢献や意見や批判が不可欠だ」（“Vice Versa” 創刊号、p.3）



英語	フランス語	非公用語
英語	フランス語	非公用語

グラフ：ケベック州における母語使用者（Statistics Canada, 2016）
英語 + フランス語
英語 + 非公用語
フランス語 + 非公用語

た、今はオンライン雑誌になつている一九八三年に創刊された雑誌があります。当時の紙媒体のものを恐らくスキャンしたものが、今はPDFで、この雑誌のウェブサイトに残っています。

そこに「Magazine transculturel」と書いてあります。つまり「トランスカルチュラル」マガジンという言葉を使つていて、これが一九八三年なので大分古い。この雑誌は、まさにトランスカルチャーという言葉・概念をキーにして作られている文化運動雑誌なのですが、面白いのは、これを作った人たちがイタリア系移民第2世代の知識人だということです。

少し調べてみると、これは二〇一六年の統計ですけれど、ケベック州は皆さんご存じの通りフランス語話者がすごく多くて、この人たちがいるから多文化主義政策が成り立ったようなところがあるわけです。英語の方がマイナーで、フランス語がメジャーです。

そこに、要するにフランス語でも英語でもないイタリアやウクライナから来た移民が、ごく少数いるらしいのです。「トランスカルチャー」というのは、そういう人たちが言い始めたことなのです。多文化主義国家の中の、さらにマイナーな知識人たちが作った雑誌において、多文化主義を要求するのではなく、トランスカルチュラルなものを求めていったところが面白いことだと思います。

この雑誌には、フランス語と英語とイタリア語でいろいろな記事が書かれています。これは創刊号に書いてあったマニフェストですが、これはフランス語、イタリア語、英語の多言語併記で書いてあります。ところが最近のページを見ると、ウェブサイトのアウトページの文章では、英語、フランス語、スペイン語、イタリア語が混ざつて一つのテキストが書いてある。同じ内容のテキストが多言語で併記されているのではなく、一つのテキストの中に英語、フランス語、イタリア語が出てくるのです。

考えてみれば、私たちがまさに今トランスカルチャー状況についてしゃべっているのもそ



うですけれど、日本語だけで考えているわけではありませんし、日本語だけで生きていくわけでもありません。モントリオールに住んでいるイタリア系移民の第2世代ぐらいの人たちは、英語、フランス語、イタリア語が並存する世界の中で生きていくわけです。それが現実だと思えます。私たちが学会発表などで横文字を交えて話すのは、それが私たちの現実によりフィットする言葉だからであって、それを無理やり日本語に変換するより、その言葉の元々の文脈のようなものを思わせるような言葉を使った方が、より自分が言いたいことを言えているような感じがするからです。そういう状況が日常的に全面化している、そうした人たちの中から、トランスカルチャーという言葉が出てきたのではないかと思うわけです。

#8

トランスカルチャーあるいはそれを指向する考え方を、「トランスカルチュラリズム」と呼ぶことにします。それは、異なる文化システムに属するとされる諸要素が、ひとりの人間の行為や意識の中で、分裂的にとりより、システムティックに共存していて、その個人が生きていることの実相を形成している。そういう状況のことをトランスカルチャー状況とか、トランスカルチュラリズムといえるのではないかと思います。この考え方を別の視点から見ると、ある唯一の強力で伝統的な文化的アイデンティティを保持していくということが、現代の世界では、もはや不可能なのではないかということですが、

#9

例えば私は今、京都に暮らしています。元々、東京都板橋区の出身ですけれど、大学から東京を出て、約三十年になります。京都というと日本の文化的中心のような感じですが、京都文化の中核にいらっしゃる人たちも、果たして爪先から頭のとっぺんまで全て京

#8

① トランスカルチャー状況について→トランスカルチュラリズムとは

- トランスカルチュラリズム transculturalismとは、異なる文化システムに属するとされる諸要素が、ひとり人間の行為や意識のなかでシステムティックに共存しており、その個人が生きていることの実相を形成している。そのような状況のことを指す (真田 2006, Epstein 2009, パーク 2009~2012, プシヤール 2012~2017)
- 「強力で伝統的な文化的アイデンティティを保持することは、もはや断念する」
- 個々のアイデンティティは最初から異種混交的で、文化集団のあいだに排他的な線を引くことは不可能
- 旅や移民の経験、グローバル企業がもたらすサービスや商品との接触、国境を越えた触発
→現代では多くの人びとにとって「自明」のこと

...こうした議論はどこが概念的

#9

① トランスカルチャー状況について→トランスカルチュラリズムとは

- 異種混交性とローカルティ
- 「我々たちはもはや(あるいはそもそも)単一の文化のなかでは生きておらず、音の種から混交的」
- 生まれついた環境から離れた文化(たとえば言語、アイデンティティ)から脱出することは不可能であり、「トランスカルチュラ的な人間は、自分がある特定の文化的背景のなかにルーツをもつことを十分に理解している。ただし彼ないし彼女は、そのルーツにしがみつこうとはしない」(Epstein 2009: 343)
- 「文化的身体」は、ラジカルに変容させ、豊かにすることができる

...こうした議論はどこが概念的

都的かという点、必ずしもそうではない。

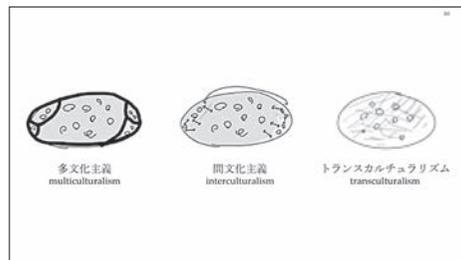
例えば、お茶の道具を何百年にもわたって作り続けているお家の方でも、アンダーグラウンドなクラブカルチャーなどに通じていたり、日常的には中華料理を食べていたりするわけです。

#10

そういう異種混交的な状態というのが、今やデフォルトなのだというのが、トランスカルチュリズムだと思います。旅や移民の経験、グローバル企業のもたらすサービスなどへの接触、あるいは自分が移動しなくても、いろいろなものに自分が触発されるということが通常状態であり、例えば、「私は、ある言語を使った音楽しか聴きません」というような形で音楽を聴いている人は、少ないと思うのです。それを強引に図にすると、#10の右図のようになるのではないかと思います。諸文化に属していた文化要素のようなものが、線のような感じで交錯していて、ある一人の人を取り上げたときに、さまざまな文化要素が交錯する点のようなものとして、人間が生きている。こういう感覚というのは、人類学者の方であれば、自分自身を振り返ってみたときに「そうだな」と思うと思いますし、別に人類学者でなくても、全く旅をしなくても、そういう感覚を多くの方がお持ちではないかと思うのです。

しかし、この状況を認めるのは、どこかにつらさのようなものがあります。世の中が混沌でいいのかとか、自分自身がどこかに文化的なルーツやアイデンティティを持たなくていいのか。トランスカルチュリズムな状況を現実として認め、認識することに対する抵抗感のようなものがある。ですから日本では、言葉としても全然流行していないのですけれど、私はこれが現実だと思うのです。むしろ現実を良くつかんでいる。以上のような考えから、私も「トランスカルチャー」という言葉に関心を持っていますが、多文化共生という言葉の

#10



影に追いやられてあまりはやらないですね。

#11

さてそこで、次にこうした状況の中で、私たちがどういうことを考えられるかということ
を、次にお話ししたいと思います。今申し上げたようにトランスカルチャー状況というのは
一種の混沌状態に近くて、文化的集団、ある文化システム、人びとが集団的に共有している
ものが解けてしまって、自分の中にさまざまな集団の要素が入り込む状況です。

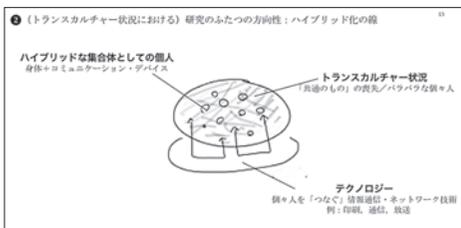
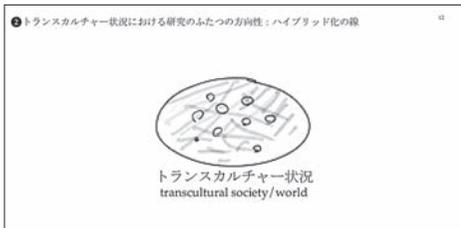
#12

「エスプレッソとアフリカの音楽とおにぎりが好き」みたいな状態の中で集団的生活を営
んでいく。すると、それぞれの人が他者に前提として期待できるような共通の要素が減って、
バラバラになっていくことが予想されます。

#13

ところが、にもかかわらず例えば日本社会が解体しているわけではないのはなぜかという
ことです。一つはテクノロジーとメディアの問題があると思います。これも良く言われるこ
とですけれども、明治維新のときに、それまで全く言語的にはバラバラだった日本国内の各
藩、オーラルにほとんど相互コミュニケーション不可能だった。日本という国をまとめたわ
けですけれど、そういうときに役立ったのが、まずは書き言葉や印刷技術でした。Benedict
Anderson や Marshall McLuhan が言うように、個人々々をつなぐ情報通信技術、今で言えば
ネットワーク技術が、バラバラな人たちの間をつないでいくのです。

例えばある日、こうした通信メディアにつながっている人びと全員に「大阪万博、決まり



ました」というようなことが、どさつと降ってくる。するとみんな、次の日の朝には「万博は大阪になつたけれど、どう思う」という話ができるわけです。個々人の文化的なありようが全然違つても、共通の話題やネタがあると話ができる。あるいは、「あるある」というものがはやつたのも、すごくトランスカルチャー状況の進展と関連していると思います。「あるよね」「あるよね」「あるよね」ということを確認していくようなことがないと、不安なのです。このように、メディア・テクノロジーが共通の情報や共通の体験を提供することで、社会としてのまとまりを作っているということがあります。

つまり、今の私たちは、生身の身体一つで生きているわけではなく、身体+コミュニケーションデバイスとして存在することで、トランスカルチャー状況を生き延びられている、ということです。インターネット、新聞、スマホ、ラジオ、テレビなどから全く隔絶すると、この社会の中の一員としての共通の話題が限りなくなっていく。社会としての統治性のようなものも消えていきかねない。コミュニケーションデバイスが進化し、機械+人間というハイブリッドな存在として人びとが生きることで、トランスカルチャー状況の社会が一応成立している。

#14

そこから考えると、このテクノロジーをより進化させるとどうなるかを考えることが、ひとつの研究の方向性としてあり得ると思います。例えばマサチューセッツ工科大学(MIT)のメディアラボに **Affective Computing group** というのがあります。そこでは人間のエモーションや情動を認知するようなシステムを開発して、それを自動運転、あるいは自動車の運転補助システムなどに応用しています。例えばすごく怒っている人が運転しているようなときは、勝手に車の方が運転をセーブ気味に、抑え目にしていくとか、ある映画を見たときに、



#14

その人の表情を見て、この人が今、どんな感情を持っているのかをマーケティングの手法として用いて、どういう映像にすると人びとによりウケるかを、映画や商品をリリースする前に調査し、それをその商品にフィードバックするというような研究をしています。

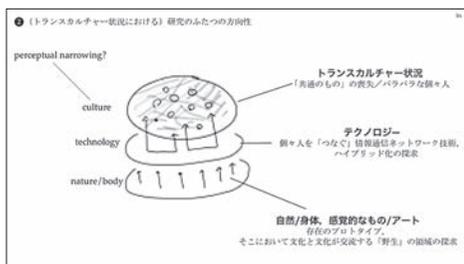
#15

すでに **Affective Computing group** から立ち上がった **Affectiva** という企業もあるようで、そういうサービスが売られている。つまり、先ほどの図でいえば、ある人とある人がコミュニケーションするとき、どういうふうにすればそれがスムーズに行くかを先読みし、補っていくような技術が開発されているのです。

Siri や **Alexa** など、ユーザーの行動をサポートするエージェントのようなものがたくさん作られています。そういうエージェントがスマホをパッと見たときに、私の感情をサッと読み取って、「疲れていそうだから、今日はそろそろ仕事をやめた方がいいのではないですか」などと言っているうちは、まだ幸せだと思えます。例えばある人とビデオ会話をするときに、この会話ではすぐ大事な要件を伝えなければいけないから、とりあえず相手に気に入られるように、私の顔と声のトーンを、いい感じにリアルタイムで変換するような技術も、もしかしたら可能になるかもしれません。

そのときに、相手と自分の文化的差異のようなものを、先ほどの **Affectiva** のような会社のシステムが瞬時に読み取って、相手が好意的に思うような反応として、私が相手に見えるように、リアルタイムで私の画像をフォトショップ的に加工し、描画する。そのようなデバイスもできているのではないかと思うのです。こういったことを可能にする研究が、これからはますます出てくる気がします。これが一つ目の方向性です。

IV 第二部 トランスカルチャー状況をめぐって



16

ここを強めていくということは、技術としては興味があるのですが、私自身にすごく関心があるのは、もう一つの方向性です。それは、少し言うのが難しい感じがするのですが、メルロ・ポンティという哲学者がいます。私の師匠が大好きな哲学者で、私はそれほど集中的に読んだわけではないのですが、メルロ・ポンティの面白い概念の中に「肉」があります。「肉」というのは、おなかのお肉のことでもあり、生き物の肉でもあります。メルロ・ポンティは肉という言葉で、「私の身体が世界と同じ肉できています」※というように使います。そして彼は言います。「われわれが見えるものの肉という言い方をするとき、われわれの意図は人類学に従事して、われわれからのあらゆる投射で覆い尽くされた世界を記述しようということにあるのではない」と。つまり、肉というとき、人類学では駄目だということです。これはどういうことか。

人類学者が見ようとしている世界というのは、基本的には文化的な世界です。人間は本来であれば肉の世界に、さまざまな文化的意味を投射している。文化を世界に押し付けてしまっている。われわれが見ているのは、世界を文化で覆いつくしたような領域なのだ。メルロ・ポンティは言うのです。

そうではなくて、「むしろ反対に、われわれの言わんとしているのは、肉的存在が」、肉的存在というものは、生き物の体であったり、世界だったりするわけですが、そういう「肉的存在がいくつものしわや顔」、ここで顔ということが出てくるのですが、「といった奥行きをもつ存在、潜在的な存在、或る不在の現前などとしてあるような〈存在〉の祖型（プロトタイプ）であり、そして感覚されうる感覚者としてのわれわれの身体は、その〈存在〉のきわめて注目し値するヴァリアントに過ぎないということなのである」※と彼は言います。

何のことか分かりにくいのですが、私なりの理解で言うと、文化のようなものとして現れ

※モリス・メルロー「ポンティ『見えるものと見えないもの』」(滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、一九八九年)、三二六三頁

※前掲書、一八八〜一八九頁

る手前にあるような肉的世界というものを、恐らくメルロ・ポンティは考えている。それは今、私たちが失っているわけではなく、今でもわれわれは肉的世界に生きている。そこには、それぞれに構成された文化のようなものがあるのではない。実は、肉的世界は、そこで別々な文化同士だと思われているものが実際には交流し合っている。そのような回路として、その肉的世界というのがある。そういう領域のようなものがあるのではないかということと言っていると思うのです。私の勝手な読み込みなのですが、そういう領域というのがあるのではないか。そしてそれは言ってみれば、アートのような領域に近いのではないかと思っているのです。

#17

私は去年から京都市立芸術大学で働いています。そこで思うのですが、そもそも現代芸術というのは、例えば日本画のような、それぞれの伝統文化の中で成長してきた、それぞれの文化ごとの美の深みを捉えるものを受けとめた上で、そういった伝統的な美というよりも大きな枠組み、もしかすると「宇宙人のような鑑賞者が現れたとしても通用するような」と言うのと大げさですが、少なくとも、その人が何人であるか、どういった文化的バックグラウンドを持っているかを超えて、人類に対して投げかける美的な活動だと思っております。

だから、現代美術作家が作品を創るときにゲームのルールというのは、どんどんどんどん改変されている。共通の前提を持っていなくても、そこに行くと感じ取れるような作品が良いとされている。言ってみれば、先ほどの肉的なレベルにおけるコミュニケーションをしようとしているのが現代美術ではないかと。

しかし、だからといって個々の文化と全く関係がないような普遍的な美だけを追求するのでもない。むしろ、ある非常に特異な状況を参照することによって、あらゆる人が、そこか

#17

そもそも現代芸術とは？

- ・表現の基盤となる「メディアム」が何であるかは、問われない（何でもよい）
- ・《作品》を見る人が何を前提にしているかをほぼ知り得ないままに、《作品》との接触や相互行為を通じて、何らかの意味をその場に生成させようとする活動
- ・それぞれの文化のなかで醸成された伝統的美というより、それを越えた（transculturalな）地平において成立する《aesthetic》な経験を生み出そうとする
 - ・普遍的な美というよりも、個別特異的な歴史や状況を参照する作品の増加

ら何かを感じるような作品を創っていくことが増えていっているように思います。

18-19

最後に私自身が今、何をしているかをお話しします。私は今、学内の芸術資源研究センターという研究所で働いていて、現代美術の中で記録に残りにくいような作品や活動の記録と継承の方法について研究しています。例えば、すごく巨大な作品や、安全管理上美術館に収蔵できない作品、ある展示空間だけに成立するようなサイト・スペシフィックな作品やインスタレーションといわれるもの、その場に訪れた人との相互行為が作品の本質部分を形成するもの、メディア・アート作品のように機械を使っている、機械がいずれ壊れてしまうような作品、そして何よりも身体表現やパフォーマンスなど、何らかの脚本や、体の動きを指示する譜が存在しないような作品や活動というものを、いかに記録できるかということを中心として考え、実験しています。

20

去年と今年取り組んでいるのは、Dumb Typeというパフォーマンスグループの「pH」という一九九〇年代初期の作品です。生身の人間と機械の両方で構成された作品ですが、機械も現存していませんし、生身のパフォーマンスも、その場で消えていってしまっている。その作品について、残された数少ない資料から、例えばすごく画質の粗いビデオテープから、何が起きているかということを書き起こしたり、シミュレーターを作ったり、そんなことをしています。

こうした仕事をしていて思うのは、今の現代美術が、特定の文化的伝統や当時の社会的・時代的狀況を背景としつつも、それらを同時に切断し、多様な人びとの感覚へと開かれたも

19

芸術大学で何をやっているか？

- 記録に残りにくい(作品として保管しにくい) 現代芸術(美術+音楽)作品や活動の、記録・継承・アーカイブ化
- あまりに巨大な作品、安全管理上保管できない作品
- 展示空間に特異に関係する作品(サイト・スペシフィック・アート、インスタレーション)
- 鑑賞者との相互行為が重要な役割を占める作品
- メディア・アート作品(機材の陳腐化・故障)、タイム・ベースド・メディアを用いた作品
- 【脚本や「譜」の存在しない】身体表現、パフォーマンス

18

トランスカルチャー状況における研究のふたつの方向性
→トランスカルチャー状況のフィールドワーク

- 京都市立芸術大学
 - 日本最古の芸術大学(1880-)
 - 1969年美術学部・音楽学部
- 芸術資源研究センター：「創造のためのアーカイブ」
 - ①作品・資料・記録等→「創造のための資源」
 - ②非芸術的な領域(ex.地域社会など)にある創造的な資源とは何か?
 - ③それらの成果を活用しうる創造的な芸術文化をいかに醸成できるか?



写真：白藤 啓

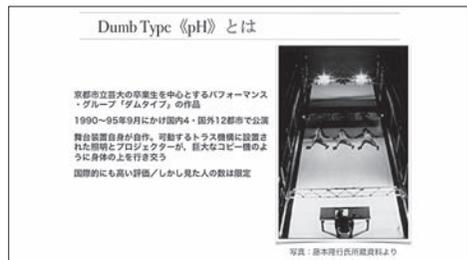
のを創ろうとする、そういう活動なのだ、ということ。いわば現代美術の領域全体がトランスカルチュラルなものとしてあり、そこでアーティストは作品を創っている。そういう場面で何が起きているかということに緻密に研究することも、このプロジェクトに貢献するのではないかと思います。

例えば、作家がインスタレーションを創るときに、会場にお客さんがどう入って、何をみて、どう動いて、どのように物と触れ合おうとするかということを、インスタレーション作家は綿密に計算して、感覚的な知識の積み重ねで経験値を上げながら作品を創っていく。そういう場で、いろいろな背景をもつ人が、それぞれに心を動かされるような行為が発生する。そのときに、何が起きているのかというようにことを検討するといった研究も、このプロジェクトに貢献するのではないか。ということ、そろそろ時間もオーバーしたので、ここで終わります。ありがとうございます。

(床呂) 佐藤先生、ありがとうございます。トランスカルチャーという言葉の語源を歴史的・文化的な状況から説き起こして、その可能性と課題、人類学への問題提起、あとは佐藤先生がやっていらっしゃる、特に芸術活動との関連から今回の科研の課題への可能性で、非常に盛りだくさんな内容を短い時間でお伝えいただきました。ありがとうございます。

——休憩——

(床呂) それでは、ご着席いただけますでしょうか。少しかぜ気味で、マスクをさせていただけますが、別にノーマイクだからしているわけではありません。のどを保護するというこ



とで。それでは時間になりましたので、プログラムに沿ってディスカッションの方を始めていききたいと思います。

先ほど申しましたように、今回の第二部、トランスカルチャー状況をめぐるセッションでは、本科研の計画班から二人の先生をお招きしております。立教大学の河野先生は哲学の立場から、日本女子大学の金沢先生は心理学の立場からのコメントということで、順番としては金沢先生が先ということでしょうか。それでは金沢先生、コメントの方よろしくお願いいたします。

コメント一

金沢 創（日本女子大学）

こんにちは、金沢でございます。コメントということなのですけれども、皆さんの話を聞きながら即興でパワーポイントを作りましたので、これを見ながらお話しします。

トランスカルチャーという言葉は、私たちもよく分らずに、どういう科研を出そうかと議論していたときに、何となく河野先生がつぶやいたのではないかと思うのですが、顔の研究プロジェクトを作りたいというのがあったのですが、そのときにつぶやいた言葉だったような気がします。

私個人の最初のイメージでは、何となくカルチャーというのは記号と制度の体系のようなものがあって、それが、どんどん交じり合っていくプロセス、そういうことを考えていかなければということで、これも本当に個人的な興味だったのですけれど、何か新しいシステムや記号が立ち上がっていく過程のようなことを考えていきたいというのがありました。

今日、皆さんの話を聞いて、本当に面白くて、最後の佐藤先生の話は、昔聞いたような話ですが、またバージョンアップしていて大変楽しかったのですけれども。最初に考えていたのは、顔／身体学というのは、心理学でいえば、いわゆる非言語コミュニケーションのプロセスですね。そういうものがあるのですけれども、トランスカルチャーといったときに、制度や記号をすり抜けていくというか、普通は制度を前提にコミュニケーションしているけれども、そうではないようなものというのを、特に女性を中心に、新しいものを作っていく力があるのではないかと、多分、そういうことが最初に話したことだったのです。

今日の話は、私なりに簡単にキーワードだけピックアップさせていたのですけれども

顔身体学：
いわゆる非言語コミュニケーション

➡記号や制度の枠組みをすり抜けていく力があるのでは？

特に女性がもつ可能性

「トランスカルチャー」？
もともとはつぶやきでした

カルチャー：記号・制度の体系？

トランス：記号が交じり合う？

➡何か新しい記号が立ち上がる過程を捉えたい

も、大貫先生の話は、刺青というものを対象に美学的な視点ですね。いろいろな「かぶき」という言葉をめぐって、これが元々は階級的なものに関連しているというのは非常に勉強になりましたし、刺青というものが持つ生々しい身体というものがあって、それとの「適切な距離」という言葉を言われていたような気がするのですが、それが今後大事だろうというようなことで、「なるほどな」と思いました。先生のお話しからは、近世、近代の日本というのがどういふふうにできてきたかということも重要だろうということも勉強しました。

宮永先生のお話は、いつも顔学会でお聞きしているのですが、美術解剖学の立場からということ、最後に山口先生も質問していたような気もするのですが、同質化と誇張、共通な部分と違う部分ということです。それが、どう作品の中で描かれてきたかということが、偉人をどう描いてきたかというテーマの中では大事ということでした。

これも宮永先生のせりふの中にあつたような気がするのですが、出会いがあつた。例えば、花子という人とロダンという人が、実際に人間として出会って、その表情を何とかして捉えたいというプロセスで、作品が変化していったという話がありました。最初は自分たちの同質性を強調したような鼻筋などをつくっていったのが、徐々に対象を正確に捉えるような顔に変化していったという話でした。そこには個と個が出会って、新しい表現が作り出されていくプロセスがあるのではないかというふうに感じました。

橋彌先生の話は、よく知っている話もたくさんあつたのですけれど、「なるほど、うまいことを言うな」と。いろいろあつて盛りだくさんだったのですけれど、その中で私なりに気になったポイントを抜き出してきました。

例えばセオリーというのは、そういうことだったのかと。今、セオリー、マインドなどと言いつつ、あまり知らなかったのですが、心というものは、目に見えないということと、セオリーというのが掛けられていたのだということ。視線というものも、見えない線で

大貫先生 イレズミ 美学
傾奇／歌舞伎：漁師 火消し 階級との関連
生々しい身体 「適切な距離」 近世・近代日本

宮永先生 異人 美術解剖学
同質化vs誇張
現場には個と個の出会いがある：HanakoとRodin

橋彌先生 視線 心理学
心の進化：「心」と“theory”
視線とgaze direction 白目
「見ているけれども働きかけない」：意図の伝達



す。そういうものが非常に力を持っているということ、それが進化の産物であるということとです。

私個人としては、見ていられど働きかけないというプロセスに注目したい。目が合っているのに何も言わないというのは、非常に何かを伝えるわけです。意図の伝達ということ、多分 Sperber & Wilson の伝達意図のことなどを意識されていたのではないかと思えます。少し Bateson にも言及があったのですが、このあたりが気になりました。

その中で、私なりに無理やりまとめてみたのですが、顔／身体といったときに、生身の顔と身体をもって、もしくははある種のメディア、顔がメディア化されたものでもってコミュニケーションが行われているわけです。そのときに、いろいろな制約があるわけです。文化的な制約、生物学的な制約、あるいは時間と空間、ある特定の場所で、ある特定のものを使って表現されているという制約。われわれが考えなければいけないのは、伝わっているのは何かということ。あるいは、そのメディアの作者が伝えたいものは何だったのかと。何も言わずにじっと見ている人は、何を伝えようとしているのかということ。それを考えていくことが、顔／身体学の、特に心理学的な視点からは大事だろうと思つた次第です。

その中でトランスカルチャーという言葉とかけますと、ある種の制約の中で、制約があるが故に、伝わらない部分もたくさんあるわけです。その伝わらないものを、伝わらないのだけれど、何とか伝えたいという力のようなものが、すごく大事なのではないか、それがトランスカルチャーということを考える上では、重要なのではないかと思つて、佐藤先生の話の聞きました。

実は、この Epstein の大事な論文のことを、それほど知らずに過ごしてきたのですけれど、大変面白かったです。時間もあれなのでこれは飛ばして、先生の描かれた図式がよかったです。相変わらず冴えていると思いましたが、多文化主義、間文化主義、そしてトランス

佐藤先生 文化人類学
グローバリズム 多文化主義 間文化主義
公的なもの私的なもの

M. Epstein Transculture. A J Economics and Sociology, 2009
68(1) 327-351

多文化主義：オリジンを重視しすぎて文化に人を閉じ込める

文化：偽装されたアバルトヘイト

事例：カナダ先住民サーニッチ 語学教師と芸術家だけ
「悲劇の記憶」の共有

1983年 Vice Versa イタリア系移民が作っている雑誌
"magazine transcultural"
1つのテキストに複数の言語

生身の顔と身体をもって
もしくは絵、彫刻、演劇等のメディアとしての顔をもって
コミュニケーションが行われている

文化的制約 生物学的制約 時空間の制約
表現の制約(絵、彫刻)

その時、伝わっているものは何だろう
メディアの作者が伝えたいものは？
見詰めているものが伝えたいものは？

制約(文化、生物、時空間、メディア)の中で
伝えたい、伝えねばならない、という「力」
もしくはその「力」によって作りだされるもの：
■トランスカルチャー？

カルチャリズムという三つがあつて、いろいろ重要なキーワードがあつたのですけれど、むしろ佐藤先生はあまり強調していなかったと思いますが、複数の文化がシステムティックに共存するということが、これが大事なのではないかと思つた次第です。

つまり、ただ交じり合っているだけでは、コミュニケーションはなかなか成立しないし、むしろアイデンティティの危機にさらされるといふか、崩壊し、守ろうとするという形になると思うのです。では、どういふふうにしステマティックにするかというところが、多分トランスカルチャーというキーワードを考えるとときに大事なのではないかと思つました。その一つの手がかりとして、アートや現代アートがあるというのは、私も大変納得がいくといふか、面白かつたです。

カナダの、このグループでも、生業が成り立っているのが語学教師と芸術家だけというのが、象徴的だと思います。アーティストというのは、こういう難しい状況の中でも、相手に何かを何としても伝えようと工夫する。最後はアートなのかと思つた次第です。私もメルロ・ポンティを好きな割には、しっかりと読んでいなくて、河野先生に教えてもらいたいと思つているぐらいなのですが、「肉的世界」というキーワードで最後をまとめておられたのは、私なりの解釈で言うと、知覚と身体というもののみを前提とした世界なのだろうと感じました。とりあえずこれぐらいで終わりました、河野先生の方に代わっていただきます。

佐藤先生 文化人類学

多文化主義から間文化主義を超えてトランスカルチャリズムへ

トランスカルチャー: 複数の文化がシステムティックに共存

アイデンティティにとってつらいことだが現実

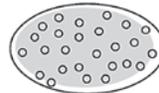
⇒「あるある」の確認が必要: 技術によって可能になる

しかしディストピア的な状況にもなりうる

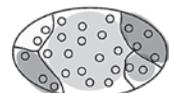
文化の手前にある「肉的世界(メルロ=ポンティ)」:
アートに近い領域? これを手掛かりではないか?

現代美術: 伝統美ではない(共通の前提ではないもの)
肉的世界レベルのコミュニケーション

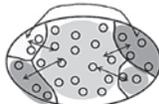
⇒知覚と身体のみを前提とする???



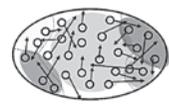
グローバリズム



多文化主義



間文化主義



トランスカルチャリズム

佐藤知久氏の図をもとに金沢が改変

河野 哲也（立教大学）

今の最初の海はマゼラン海峡です。立教大学の河野でございます。佐藤先生から、私の立場からカナダのお話を聞いて懐かしく思ったのですが、一年以上行っている国というのが四つありまして、最初はベルギーに行き、次にカナダに行き、三年前ぐらいにフランスとアメリカという形で行ったのですけれど、最初はメルロ＝ポンティを専門として勉強していたので、フランスというのは普通のあり方ですが、給費留学に落ちたという理由もあり、ベルギーの給費留学に受かったという端的な理由もあるのですけれど。ベルギーの次にカナダを選んだときも、あえて言語的に二つで、多文化主義を取っている国を選んだところがあります。そういう関心があったので、今回こういう形で共同研究させていただくのは、私としては長年、研究したいと思っていたことがやれるという感じです。

ベルギーは、ご存じのようにオランダ語とフランス語ですが、オランダ語というとフランドル人怒るのです。フラマン語、フランデレン語というのです。もう一つはワロン語というのですが、実際上はオランダ語とフランス語です。オランダ語とフランデレン語は、東京弁と大阪弁ほどにも変わらないにも関わらず、彼らは違う言語であると強硬に主張していて、ワロン語というのは、フランス人からワロン語だと言われているのであって、本人たちはフランス語だと言っています。

どこに帰属しているかに関して、非常に微妙なところがあつて、ベルギーという国は百五十年しか歴史がありません。日本の明治維新ごろにできた国です。それまではブラバント公国というところで、ゲルマンとラテンというのは日本と中国以上に違うのかもしれない



ん。その違いが、なぜまとまっているかというところ、やはりカトリックという宗教的なまとまりです。カトリックであるような、フランスではない地帯で、オランダやドイツはプロテスタントになります。宗教的なまとまりで、何とかまとまっているという国に行きました。

カナダについては、先ほど佐藤先生からご説明があつたとおりで、ベルギーの場合はオランダ語とフランス語が大体半々で、人口も半々で、七万人ほどドイツ語がいて、数万人ほど少しだけイタリア語があるので、公用語は三ヶ国語併記です。カナダの場合、ケベックは多分人口が二割ぐらいしかいません。人口比でいうと八対二ぐらいで、大きな違いがあるところに行つたのです。

けれども、この国に行つたときに時々感じたのは、特にベルギーは言語的に戦争状態で、ブリュッセルという中立的なブルジョアの町にいたので、レストランで何語を話すかで、違うのです。下手をすると、私が行く二年ぐらい前には銃撃戦があるぐらいの戦争状態でした。戦争状態でなくなるのはワールドカップのときだけで、そのときだけまとまると言われている感じです。むしろ、どちらかというと独立したいのだけれど、独立するとヨーロッパの中であまりにも弱いので、固まっている。そう言ってしまうと、ベルギー人は怒るかもしれませんけれど、それが本当のところだと思えます。

カナダの方ですけれど、カナダは多文化主義というのをオーストラリアと同時に取つていて、実情というのはどういう感じかというと、私が見る限り、私が行つたヨーク大学という、スコットランドのユニバーシティ・オブ・ヨークではなく、ヨーク大学というのです。「パリ・テキサス」とありましたけれど、あれはテキサス州パリです。パリ・テキサスと格好よく訳さないで、テキサス州パリと訳すべきだと思います。テキサス州のパリスという恥ずかしい町なのです。単純に言うと、どこかの田舎に〇〇銀座と付いているのと同じ感じなのです。カナダには、ロンドンという町もありました。その恥ずかしさというのは、パリ・

テキサスと格好よく付けてしまうと、伝わりません。でも、何かとても良い映画でしたね。それはともかくとして、話を戻しますと、そういったところでは、ヨーク大学に到着したとたん、国連の世界人口の比のままに人間がいるという感じでした。その多様性は、ニューヨークやロサンゼルスのは比ではないと思います。ハワイといい勝負という感じですが、それだけ多様だったのですけれど、実際インドネシア人とか中国人とかもあるのですけれど、バラバラになって住んでいるのです。全く相互に関せず、インドネシア人はインドネシアコミュニティの中で生きていて、中国人は中国語で生きていて、中国人コミュニティの中で生きています。そんな感じで、日本人はコミュニティを作れない不思議な民族です。バラけてしまつて、白人の中に散つて生きていくというのが日本人の不思議なアイデンティティで、多分、日本という島を離れてしまうと、拡散してしまうでしょう。吸収されてしまうのではないかと気がします。ともかく、そんなふうになっていて、多文化主義というのは、実を言うとバラバラの平衡状態で、先ほど佐藤先生からご説明があつたような感じというのが実感でした。

元を辿ると少し話が長くなるのですが、イギリスとフランスの植民地を考えてみると、イギリスの植民地の方が多文化主義を取つて、フランスは普遍主義を取りました。フランスというのは、特定の民族の国ではなく、普遍的な世界原理でできた国なので、どのような民族の、どのような宗教も受け継げるが、この普遍的な近代性は全員がしたがわなければならぬということです。従つて、公共の場に宗教をもたらしはいけないという、そこがスカーフ論争などになるわけですが、その透明な普遍性というのをフランスは主張するのですが、実際には透明ではなく、たつぷり、ゴール人の文化がくつついていのです。それを普遍ということで押し付けるので、そこで問題が起こります。

イギリス型の植民地というのは、遠くから統治するというインド会社が基本だと思いま

す。遠くから統治するので、それぞれの民族の文化差が維持されるのですけれど、中央の英語という言葉と経済システムがうまくいかない、つまりコミュニケーションシステムです。金融と言語という二つの流通システムで維持されていて、これが壊れると、解体してしまいます。多分、アメリカがそういう感じですが。ただ、アメリカは私に言わせると、フランスとイギリスの中間のように思います。カナダから見るとアメリカは、私の感じではアメリカ人らしさを求める国だと思います。カナダ人から見ると、アメリカ人というのはアメリカらしさを誰にも求めて、うるさいと思います。それは、少しフランスっぽいと思います。そういう感じがします。

こういうものがあつて、フランス型がどうなっているかという、カンボジア、ベトナムなど、要するに中央の制度が強くて、そこから反する分子を徹底的に排除して、たくさん虐殺が起きた国が多いのです。そう考えてみると、フランス型というのは、どこかで排除を引き起こしやすい性質を持っているかもしれないと私は思うのですけれど、日本の多文化共存というのは、フランス型っぽい響きを感じるのです。ただ日本は、フランス以上に日本色が強い普遍主義なので、戦争前・中にやって大失敗しているわけです。同じことにならない方がいいと思います。

アメリカ人の人種というのは不思議な概念で、ヒスパニックを人種と呼ぶのです。スペイン系の人々はコーカソイド、コーカシアンなので白人だと思ふのですけれど、ヒスパニックは人種だという不思議なものなのですけれど、アメリカの中では、先ほど佐藤先生がおっしゃったような状況が生じていて、カナダで言うマジヨリテイのカルチャーが押していて、マイノリテイはずっと押されつ放しで、結局は多文化と言いつつ、マジヨリテイの文化を知らない間に押し付けられていて、フランス風の植民地のような状況になっていると思うのです。

するとどうなるかと言うと、本人たちは民族の固有性を強調することによってしか維持できず、民族の持っている伝統的な文化のカルチャーを主張することによってしか、自分のアイデンティティを保てないところがあって、それがアイデンティティポリティクスという形でよく言われるのですけれど、私はそういう点において、アメリカ的な多文化政策は、あまり良くないのではないかと思っています。時間がないので、アメリカのことは放っておきましよう。

私は長い間外国に行くときは、必ず剣道の竹刀と防具を持っていくのですけれど、各国が剣道をいかに解釈しているかというのが非常に面白くて、今度パリに行くので、また持つていこうと思っています。こう言っても誰も分かってくれないのですけれど、パリの剣道は力押しが強い鹿児島的な感じがするのです。「ちえすとー」みたいな感じの剣道で、体当たりで、連打が多くて、「しつこいなあ、この人たち」と。何かが鹿児島とフランスを結び付けているのだろうか、東京人としては思っています。そのようなところがあって、多分、歴史的に何か、そういう感じの先生の影響を受けているところがあるのではないかと思っています。

それはともかくとして、私がカナダに行ったときに剣道で面白かったのは、カナダに来て三世代目で、私の父より年上で、祖父よりは若いぐらいの人がいます。どちらかといえば四世代目ぐらいで、日本語は全然しゃべれません。剣道はやっているのですけれど、近代剣道をやっていないのです。つまり、明治維新の最初に持ってきた剣道を、まだ維持しているのです。これは周辺残存現象というもので、剣道をやっている若手の人たちも、漢字はもちろん、日本語を全然しゃべれなくて、剣道場以外では、カナダ人とか北米人に他ならない行動パターンなのですけれど、剣道だけは古風なものを守り続けているのです。

日本では、それはもう少し古い形なので、そういうのはすたれています。日本の剣道とい

うのは、英語で言えばブリティッシュイングリッシュ、ロンドンのイングリッシュなのです。イギリスの英語の方が、アメリカ英語より新しく、アメリカ英語の方は18世紀ぐらいで古いのです。それと同じように、カナダの剣道も古いのです。それを後生大事に古式ゆかしい形で守っているのです。日本人の私が行くと「オリジナルが来た」という形なのですが、オリジナルの方が新しいという奇妙なことが起こっていて、不思議な感じがします。

さて、あまりたいしたことはできなかったのですが、先ほど佐藤先生がおっしゃった個人内のシステマティックな共存は、金沢さんが取り上げてくれた面白い、いい言葉ではないかと思うのですが、何かをやっていくうちに、多様な文化というのを個人的にどうまとめ上げるかというのが非常に重要な点だと思えます。確かにアイデンティティも、そういうものではないかと思ったりします。むしろ、私がいるいろいろな形で、各国にいる日系人たちを見ると、どちらかという、帰属するというところにそれほど意味があるわけではない、むしろ、いろいろなカルチャーを知ることによって、己とは何かということを照らし出す道具として、文化を考えている感じがするのです。

つまり、私が行く国ではそれぞれ剣道が違うわけです。こちらは競技型の剣道で、向こうは随分古いやり方をするわけです。そうしたときに初めて、彼らは日本語は全然しゃべれなくて、生活様式も日本っぽくないわけです。そうしたときに、やっと自分の剣道は何だったのかが分かるのです。剣道もカルチャーの一つだとすると、もしかして個を照らし出すためとして、いろいろなカルチャーがあつて、他のカルチャーを知ることとか、同じものをやりながら別のカルチャーを知ることによって、自分が何であるかというのがやっと分かるのではないかと。帰属するということより、そこから照らし出して、自分をつくり上げていく装置として、文化があり得るのではないかと思つたわけです。

社会において、同じようなことが可能でしょうか。何だかんだで私たちは外国では大学で

暮してしまうので、それほど人種差別も受けたくないし、私もトータルで外国に四年以上も行っていると思うのですけれども、差別的な態度を感じたことがあります。私の先生は二十数年も外国にいた先生ですが、一度も感じたことがないと言います。大学の中にいると、少し分かりづらいかもありません。外では剣道で外の人を感じるのですが、剣道をやっている日本人を尊敬してくれるので、あまりピンと来ない場所にいたのかもしれない。

ですから、社会におけるそれぞれのグループ性が強くて、自分が知っている行動の範囲が広くない人たちの間で、このようにシステマチックな共存が可能なのでしょう。カナダで言えば、先ほど言ったように工場労働者の多いインドネシア地域のグループなどは、ほぼそこから出ないで済んでいるような気がするのは、そのような人たちとの共存は可能なのか、あるいは、そういうことをする必要がないのかといったことが問題になってくると思います。ただ、カナダのインドネシアコミュニティに住んでいる若い人たちは、もうカナダ化されているということです。インドネシア人のオリジナルの人たちが来たら、「全然カナダ人だね」と言われてしまわないかと思うのです。

これがトランスカルチャー状況ではないか。自分が帰属しているつもりでいるけれど、その帰属している社会が、実を言うとオリジナルではなかったというか、そもそも日本人のもりでいたけれど、実を言うと日本人ではなかったようなことというのは、認知と実際上のずれというのが、すごくあるような気がします。

従って、剣道のオリジナルが何かは良く分かりません。もしかするとカナダ人がやっているのが、まともな剣道だと言えるのかもしれないし、日本は強いけれど、もしかすると刀で切るというオリジナルのフォームからは全然外れてしまった、別の競技をやっているのかもしれないと思ったりもします。つまらない話になりましたが、以上です。

(床呂) はい、どうもありがとうございます。それでは今、お二人のコメントーター、河野先生、金沢先生からのコメントを受けて、ディスカッションに入りたいと思いますけれど、こういう順番でさせていただければと思います。まず、佐藤先生の方から、コメントーターお二人の方へのレスポンスを頂いて、その往復が終わった後で、フロアの方に質疑を開くという順番でよろしいでしょうか。

よろしければ佐藤先生、そこでよろしいですか。それとも前で。では、前の方でお願いします。

(佐藤) 金沢先生、河野先生、コメントをありがとうございます。最初に金沢先生というか金沢君のコメントですけれど、基本的にトランスカルチャー状況はディストピアではないかというのはそのとおりです。私は、われわれの現状をすごくうまく照らし出している言葉だと言いましたけれど、かつ、それほど悲惨ではないような感じで語りましたが、ディストピア的な状況にもなり得ると思います。

#21

先ほどは飛ばしてしまっただけですけれど、トランスカルチャー状況を、ある意味フィールドワークしている本として、二冊紹介します。松嶋健さんの『プシコ・ナウティカ』という本と、木村大治さんの『見知らぬものと出会う』という、一見全然違う二冊の本です。前者はイタリア精神医療の人類学で、イタリアでフィールドワークした本で、後者は宇宙人との相互行為についてSF小説をベースに考えるという、ある種トンデモ本なのですが、東京大学出版会から出ています。

この『プシコ・ナウティカ』という本の中に、すごく心を打つエピソードがあります。こ

#21

● トランスカルチャー状況における研究のふたつの方向性—トランスカルチャー状況のフィールドワーク

- 「理念的考察や文化的運動として論じられがちな」トランスカルチャー状況を、より具体的に経験・記述し、そこで生きる方法についてさまざまなレベルで論じていくこと
- 松嶋健 (2014) 『プシコ・ナウティカ』イタリア精神医療の人類学
- 木村大治 (2018) 『見知らぬものと出会う』宇宙人との相互行為論



これは精神医療の本なので、何らかの形で精神保健センターというか、精神医療に関わってきた人たちが登場します。その中に、おじいさんがイタリア人で、おじいさんがイタリア人と結婚した後にスイスに行って、スイスで生まれた息子が、その後アルゼンチンに行く。そのアルゼンチンで生まれた人の話が出てきます。アルマンドという人なのですけれど、祖父がその彼がおじいさんの元に時々帰ると、「お前はアルゼンチン人じゃなくて、イタリア人だよ」というようなことを言われる。けれど自分は生活のベースがアルゼンチンにあるので、自分がいったいどこにいるのか分からなくなって、苦しくなっていくって、だんだんうつになつていったというのですね。分裂したアイデンティティ状況というのは、このように心を病むことに直結する可能性もあります。

ただし、この本を紹介したかったのは、その苦しみというより、ある意味トランスカルチュラルな状況の被害者のような人がどうしたら生き延びられるかということ、描いているからです。言ってみればそれは、自分のアイデンティティを開いていくような生き方になるのですね。

たとえば、アルマンドはいろいろな言語環境の中で育っているわけだけれど、ある人から見ると、アルマンドは英語もフランス語もイタリア語もスペイン語もしゃべれるから、観光業にびったりねと。それまで自分にとってネガティブだったものが、他の人から見れば、すごくいいことという感じに見える。こうして彼は、B & Bを始めるんです。そのB & Bも、自分の家を他の人とシェアすることで、助け合いながら生きていく、台所をシェアするといったように、単なる観光業ではない。そうして自分は少し調子がよくなってきたので、スペイン語系の移民の人たちをサポートする活動をしたりする。そういう生の形、トランスカルチュラルな状況の中で生きる生の形のようなものを、この本はすごくクリアに描いていると思います。個人の中で、いろいろな要素がシステムティックに共存しているというのは、

もちろん良いときもあるわけですけど、全然うまく行かないときもあるということだとも思います。

従って、河野先生のおっしゃった、社会的なレベルでシステムティックな共存が可能になるかという問いに関して思うのは、直近の状況などを考えると、非常に難しい。けれども、小さなローカルな場面でこそ、そういうことは逆に成り立ち得るのではないかという気がします。

#22

もう一つメルロ・ポンティの肉的な世界というのは、知覚と身体のみの世界なのではないかという金沢さんからの問いかけがあったんですけど、それを感じさせるのが、次の本です。これは宇宙人との相互行為がどういうものであり得るかというのを、木村大治さんという主にアフリカでフィールドワークをしながら人間と人間の相互行為を比較文化的に研究している、すごく面白い人類学者が考えた本です。宇宙人と人類が接したときに、そもそもコミュニケーションが成り立つかどうかというより、どの状態になったら成り立つたと考えられるのかというのを、コミュニケーションの基底的なレベルにどんどん降りていって、どうい相互行為が成り立ち得るのかということを考えている。

この本の中で重要な概念が、共在と投射です。co-presence、co-existence、共に有るといふ「共在」と、投射 (projection) です。共在といふのは、今この場にある相手と、face-to-faceで、宇宙人なので顔があるかどうか分かりませんが、相手とともに存在したときに、その場にあることです。次に投射というのは、理論的にいえば、その場にマニフェストであるようなことから、その次に何か起きることを予期する、それを予想する、それがプロジェクトン (投射) なのですけれど、その共在と投射の2対によって相互行為とい

#22

② トランスカルチャー状況における研究のふたつの方向性→トランスカルチャー状況のフィールドワーク

- ＊ (理念的考察や文化的運動として論じられがちな) トランスカルチュラルな状況を、より具体的に経験・記述し、そこで生きる方法についてさまざまなレベルで論じていくこと
- ＊ 松嶋健 (2014) 『ブシコ・ナウティカ』イタリア精神医療の人類学
- ＊ 木村大治 (2018) 『見知らぬものと出会う』宇宙人との相互行為論

うのは成り立っていると木村さんは考える。もちろん次に何が起きるかということに関しては、Aという人間が予期すること、Bという宇宙人が予期することは違うかもしれないだけども、それが少しずつれたときに起きた、次の共在の瞬間のあり方に対して、また新しいプロジェクトが生まれるであろう、と。それが何らかの形でつながっていけば、相互行為のようなものになるのではないかと議論をしているのです。

要するに、共有する前提条件がものすごく低い状況であっても、そこでの相互行為を成り立たせるようなものは何かということ、ある種、理論的に抽出している。こういうものと、恐ろしく具体的なものが接しているのが、人類学の面白さだということと宣伝になってしまうのですが、それを一緒に考えることが面白いのではないかと思っています。

V 総合討議

(床呂) 佐藤先生、ありがとうございます。それでは、ここからは総合討議ということで、会場の方に質疑を開きたいと思います。どなたでも結構ですので、コメントや質問等ある方は挙手をお願いします。申しわけありませんが、先ほど申しましたように冊子化を想定しておりますので、できれば、お名前と所属先を先に言っただければ助かります。いかがでしょうか。どなたでも結構です。

(フロア) 佐藤先生に伺いたいのですけれども、金沢先生も言っておられたスキーマがものすごく魅力的だったのですけれど、あのイラストの中に、あえて政治などを入れるとすれば、その位置はどこにあるのでしょうか。多分、ジジエク (Slavoj Žižek) などであれば、あそこに何か入れそうだと思うって聞いていたのですけれど、どんなふうに考えられるでしょうか。

(佐藤) あの図式の中では、トランスカルチャーな状況でも、われわれが、それなりの一定性を持って暮らしていられるのは、テクノロジーのおかげだということで終わっていたのですけれど、政治や資本主義も勿論、われわれをつなげ、一体にさせるものとしてあると思います。それも、バラバラなものとして一体化させるといいますか。たとえば今の大学教育では、大学を出るまではみんな仲良くと言いつつ、大学を出た瞬間に「全員を敵として勝ち残り」となるわけです。一見、国民的同一性のようなものを持っているような感覚を持たせながら、全員が全員に対してホップズ的に闘争するというか。でも、そのことによってのみ生きながらえていけるような政治経済をつくっていることによって、要するに全員が全員と競争し合う形で、共存しているようなことになっていると思うのです。今日は文化的な話ということ

に寄せたので、何も言わなかったのですけれど、実際にはテクノロジーと資本主義的な政治経済体制が、一つの社会あるいは世界レベルでの連関性をつくっていると思います。

(床呂) よろしいですか。はい、他の方。

(富沢) 静岡県立大学の富沢と申します。今日は、いろいろ刺激的なお話をありがとうございます。先ほど佐藤先生が言われたような、個人の中で異文化がシステムティックに共存するという意味でのトランスカルチャー状況というのを前提にしていた場合、今日のご発表をどのように整理できるのかというところで、各発表者からリアクションを頂ければと思います。

特に感情の問題と、その感情の表出ということが橋彌先生のご発表にあつたと思うのですが、例えば大貫先生は刺青の問題を扱っていらっしゃいますけれども、刺青は基本的に、かなり表出の部分が大きいでしょう。例えば個人が刺青をするのは、個人のアイデンティティの問題もあるかもしれないし、刺青で何かを表現する、オリジンの表出の問題が関わっているかもしれません。

その場合、例えば刺青における感情面の表出の部分で、何かシステムティックな共存というか、相互に刺青に関わる方たちの間で、そういうのがあるかどうかです。特に最近、欧米人などの刺青の問題があつて、それが日本に来て、前回の研究会のときにも少し話題になったと思いますけれども、日本という脈絡の中での刺青の意味と、それを自分たちのアイデンティティや表出の問題として持ち込んでいる方たちとの間で、相互の接触があると思うのですが、その中で表出上のシステムティックな共存というものがあるかどうかについて伺えないうだろうかということ。何か共有するような表出の問題があるのかどうか。

同じことに関連して、宮永先生は、異人をどのように表現するかという絵画の問題を扱っていらっしゃいましたけれど、その中で異人を表出するときの同質化と誇張ということを

おっしゃったと思います。同質化する部分というのは顔の表現について言うと、例えば日本人が異人の顔を描くとき、欧米人が日本人の顔を描くとき、その間の同質化というのは、どのような部分の同質化が見られるのか、そこはシステムティックな共存というのがあるのかどうかということのを伺えればと思います。

それから橋彌先生からは、視線の問題を取り上げていただきましたが、心理学ではいろいろと普遍的な問題というのを考えだと思っています。特に人間の発達過程の中では、9カ月ぐらいから視線がかなり文化的影響を受けていくと。逆に発達の最初の過程で文化差を越えて共有される視線の問題があったら、その文化を超えたトランスカルチャー状況における視線の共有される部分というのは、どのようなものが指摘できるのでしょうか。少し抽象的な質問かもしれませんが、文化を超えた視線の問題というのが、何か指摘することができるとかということのを伺えたらと思います。ということで、お三方にそれぞれコメントを頂ければと思います。

(床呂) はい、ありがとうございます。富沢寿勇先生は評価委員の方をお願いしている関係で、もう一人のコメントーターのような素晴らしいコメントというか、ご質問をありがとうございます。それでは、お三方にそれぞれ個別にご質問があったと思いますので、よろしければ大貫先生から順番にレスポンスをお願いしてもよろしいでしょうか。

(大貫) コメントを頂き、ありがとうございます。そうですね、今のトランスカルチャー状況を踏まえて、今日、私は具体例を近世に絞って、それを補助線として使いましたけれども、私がこの研究をするに至った一つの基盤として、なかなか人間は身体から逃れ得なくて、芸術においても、どんな表現においても、身体というメディアウムが介入すると、必ず身体というメディアウムスベシフィックな現象というか、作品なり何なりが生じてしまうから、その中でイレズミという制約を考えたときに面白い研究対象だと思って、この研究を始めたので、

実は近世的なものだけに限らず研究しています。

そういうことを踏まえながら言うと、現在、身体というのは物理的身体とか、宗教的に定義される身体とか、身分階層で分けられる身体とかいう以前にDNAレベルで分解されて、情報になってしまっています。それを媒介するのも結局、佐藤先生がトランスカルチャーの中でディストピアにならないために何かというときに、テクノロジーに媒介される世界が想定できると言われたのですけれど、まさに、そういう情報によって身体と身体を分かつもののようなものまでも、垣根がどんどんなくなっていくって、それをどう捉えるかというのが哲学や美学で課題になっていると思います。

そういうことを踏まえて現代のリアルなタトゥーに話を戻すと、結局、昔も今も変わらず、ずっと身体をマテリアルに、だからこそ身体という材料を一つの制限として、どういう媒材を使って、要するに顔料や灰などを使って、どれだけ彫る部分を拡張できるか、あるいは、先ほど挙げていただいた眼球に彫れるようになるなど、表現の多様性をどんどん求めていったのです。

すみません。なかなか整理ができないのですが、そういう制約の中で、ありとあらゆる進化を求める、それを進化と呼ぶのかどうかは別として、発展を求めるということ、その行為性そのものによって、一つのコミュニティではありませんけれども、その行為やプロセスを共有することによって、何か結ばれるものがあるのではないかと思いました。

彫師は、お客さんを人として尊重しながら、マテリアルとして見なければいけないので、そこは一言では説明できない関係性が生じるし、国によっても全然違います。そういう部分も含めて、共に表現や技術を発展させるというのが、一つのキーワードではないかという形の答えでよろしいでしょうか。

(床呂)

後ほど、もしかしたら往復があるかもしれませんが、とりあえず宮永先生、レ

スポンスをよろしいでしょうか。

(宮永) ありがとうございます。先ほどの山口先生のご質問にもあつた部分の、誇張と同質化について、さらにご質問頂きましたありがとうございます。やはり、誇張についても同質化についても、その原因は両方とも情報の不足というところが一番大きいと思います。先入観もあるでしょうか。今できるお答えとしては、同じところに起因している情報の不足だろうと思います。画家や彫刻家の中にある先入観の強さというものも、あると思いますが。先入観がどういふふうに培われるかは、時代や状況など個別に違うと思いますけれども。その前に、私の後でお話しくださつた橋彌先生や佐藤先生、それからただ今コメントを頂きました金沢先生、河野先生、諸先生方のご意見がすごく刺激的で、伺っていると私は化石かなと、少し思いました。

美術解剖学というのは、元々十五世紀のイタリアルネサンスに発祥しています。ヨーロッパではその後、美術家のための必修の科目となつていきます。それが明治の前後に日本に入つてきて、日本でも一五〇年ぐらいの歴史はあるのですけれども、連綿と変わらず等身大の人体を扱っています。解剖学と美術解剖学というのはルネサンス以後の三百年は、ハネムーン関係だったのですけれども、だんだん解剖学が細分化されてきて、先ほど大貫先生の議論にもありましたけれども、器官が組織に、組織が細胞に、細胞が遺伝子に、遺伝子が分子へと、どんどん細分化して、現在の解剖学研究の先端は分子生物学になつていふのです。しかし、私たちの生活が等身大で営まれている以上、やはり等身大の人体、肉眼で見える人間というものを考えています。

諸先生方の議論の中にも、そういう形而上の議論と、それぞれの先生が体験されている現実というところの関係が本当に刺激的でした。答えになつていふでしょうか？ここで置かせていただきたいと思ひます。

(床呂) はい、ありがとうございます。それでは橋彌先生、よろしいでしょうか。

(橋彌) 二点ご質問を頂きました。感情をもう少し一般化すると、表出と内面の問題で、それを例えば刺青というところに展開すると、日本の今の議論というのは、表出を表出として受け止められていないことになるのかも知れません。なぜかと言うと、恐らく外部として矮小化しているから、刺青が持っているメッセージを外部として、言ってしまう罪人の印であつたり、アウトサイダーのシグナルというところで処理してしまつて、その多様性を見ない、見るリテラシーというのが文化的に一般化していない。すると、刺青をまもっている人のメッセージと、受け取り手の読み取りに齟齬が生じているというのは、先生にご指摘いただいたとおりにあるのではないかと思いました。

もう一つは視線の話をしましたけれども、山口先生たちが、乳児期の顔のスキャニングの文化差の話でされているようなところとも、対応すると思います。赤ちゃんが直面している環境というのは、日本文化でもアメリカ文化でも何でもなくて、単に「周りの環境」です。周りの環境の中に適応していく結果、共通項としてヨーロッパでは口の方を見るようになるし、日本では目の方を見るようになるというようなことが、コモングラウンドとして生じてきます。それを文化と呼べるわけですけれど、子どもがやっていることというのは、恐らく周りがやっていることであつたり、表出のパターンの普遍項を検出して、そこに適応しているのです。「文化的に違うことをやっている」わけではなくて、バイオロジカルに同じことをやっているのだけれども、所与の環境が違うので、結果的にアウトプットの違いが生じるのです。これは言語についてもそうですし、*Olivier Pascalis*さんなどがやられている顔についてもそうだと思います。

そう考えると、非言語コミュニケーションにおける、例えば顔を見るということが関しても、それにおけるバイリンガル状況というのは、いったいどういふことがあり得るかという

こともできそうです。バイリンガル研究というのは、言語に関しては歴史が長い分野ですけれども、それが、まさに非言語コミュニケーションのレベルでどういうことが起こるかというのは、これから見ていくことができるのではないかと、質問を伺って思いました。

(床呂) よろしいでしょうか。まだ若干、デイスカッションの時間がありますので、いかがでしょうか。まだ、ご発言されていない方でも。第一部も含めますと、本当に多岐にわたるテーマとアプローチですので、場合によっては単純な事実関係確認的な、あるいはその概念の意味は、その分野ではどうなのかといったような基本的・確認的な質問等でも構いませんので、いかがでしょうか。

(河野) トランスカルチャーといったときに、共通性と類似性のどちらの方に目をつけるのかというのが大切な点で、人間の体というのは、正直に言って大差ないと思うのです。私の近くにグレートデンを飼っている人がいるのですけれど、グレートデンとチワワの違いほど、人間の間に違いがあるかという、違うと思うのです。グレートデンはポニーぐらいあって、立ち上がると二メートルぐらいあります。それと比べると、われわれは十倍の身長差はありません。犬は顔も全然違います。それと比べると、人間の身体上の差というのは大差ないと思うのです。その意味では、われわれは、かなり似ているといえれば似ています。多分、人は、似ているところは割と無視して、自分のアイデンティティとの違いに求めるところです。

カルチャーも同じで、人間は家に住んでいるという点で全く同じですし、食べ物も毒キノコを食べている人はいないわけです。フグの毒を食べたら、みんな死んでしまうので、その意味では、割と似たり寄つたりの物しか食べられないし、カルチャーの似ている構造を取り出そうと思えば、いくらでも可能なのです。先ほどベルギーのオランダ語とフランデレン語の違いのように、こちらから見ると大阪弁と神戸弁ぐらいしか差がないのに、そのぐらいの

少しの差でもこだわって、別の言語だと言います。こういうこだわりで、オランダ語とフランダース語を区別するわけです。同じように、ほとんど差がないようなフランス語とワロン語で、フランス人はベルギー人を差別しています。私がワロン語でしゃべったら、そこで初めて差別されました。日本人であるうちは良かったのですが、ワロンになったとたんに差別されたという妙な経験があります。

ちなみに、テキサスに住んでいると言うと、アメリカ人にこれほど差別されるのかと思いました。アメリカのインテリに、「テキサスに住んでいる」と言うと、これほど激しい口調で差別される所というのは、アメリカが初めてだったので、どこでその違いがあり、何で区別するかというのは、共通のものにすればたくさんあるにも関わらず、その違いのところだけ目をつけるというものがあって、何を文化と捉えるかの線引きというのは、実態上の違いというより、認知上の違いで、かつ個性が高い感じがするのです。だから、もしかするとカルチャーという実体について考えるのは、あまり意味がないのかもしれない。

(床呂) 佐藤先生。

(佐藤) 剣道をなさっているのですね。多分、そこが大事だと思うのです。先ほどからの話をうかがって思ったのは、最初に山口さんがおっしゃった *perceptual narrowing*、見えているものが見えなくなるプロセスが、赤ちゃんのころにあるというのは、まさに文化を身につけることによって、見えるものが見えなくなっていく、あるものがあるアスペクトで見えていくというか、そういう決定的な身体的刻印と言ってもいいような、まさに彫り物のようなものが、成長の過程で体に叩き込まれるということです。そうやって自分の身体能力のようなものが囲い込まれていくのですけれど、狭まっているとはいえず、それはもう一度解きほぐせるような気がしています。

そのときに一番分かりやすいのは、体の動かし方ではないでしょうか。例えば古武術をや

ると、何か体のあり方が変わります。自分の中に身体的に刻印されていたり、それこそ視覚レベルにまで影響を及ぼすようなものというのは、単純に消し去ることはできないのだけれど、身体のように解きほぐせることなのではないか。そういう意味で文化を実体化・固定化する事は危険だと思います。

橋彌さんがおっしゃったこともそこに関係していて、環境が変わるときに、そこに可塑的に対応できるような能力というのがあるのではないかと思うのです。そういうマッサージュとかワイドニングのようなものが行われるときに手立てになるものが、顔、身体、情動などのように、ある程度文化的な制約がかかっているけれども、〈存在〉の肉に近い領域にあるもののレベルで、鍛え直しのようなことが起きるということではないかと、私は整理できるような気がしました。

(床呂) はい、ありがとうございます。他の方、いかがでしょうか。

(橋彌) 今の *perceptual widening* で思い出したのですけれども、金沢さんも私も一時期、チンパンジーの研究をやっていたことがあって、初めてチンパンジーを見に行ったとき、「これがアイ、これがペンデーサ、これがクロエ」と名前を教えてもらっても、こちらは見分けがつかないので「この人は何を言っているのだろう」という感じなのです。それが数カ月たつと「鈴木さん」と「山田さん」を見分ける作業と、チンパンジーを見分けるのに、全く差がなくなっていく。それをニホンザルをやっている同級生に話すと「チンパンジーの顔は分りにくいんだよな。ニホンザルは分かるんだけど」と。それは、その人がチンパンジーをやっていないからだけのことです。*perceptual narrowing* は済んでいるはずなのですけれど、リアダブレーションもそれなりにできるものだなと。

私も、例えば英語は死なない程度にしかできませんけれど、そのおかげで死なずに済むわけです。チンパンジーについては研究をする、とりあえず顔を覚えるというプレッシャー

があるので、英語もしゃべらなければ、書かなければ仕方がないというプレッシャーの中で、できるようになっていく。そのように、環境要因で何かが起こること、ワイドニングが起こるドライブというのが何だろうかというのは、確かに面白そうですし、自分でも知りたいと思いました。

(床呂) ありがとうございます。今の橋彌先生の話に少し付け加えると、以前にもどこかの場で申し上げたかもしれないのですが、チンパンジーの個体識別だけではなく人間でも起こり得ます。私は三年間、東南アジアにフィールドワークに行ったのですが、初めは、みんな同じように浅黒い、あまり表情が読めない集団だったのが、三年たって日本に帰って見たら、逆でした。東南アジアの人の表情や個体識別は、非常にクリアにできるので、成田空港に降りて電車に乗ったときに、シヨックを受けました。表情が全く読めなくなっていて、海外の人が言う「能面のように表情が分からない日本人」というのはこれかと思った記憶があります。そういう、ある種のワイドニングというか、感覚のチューニングのようなことというのは、もちろん人間同士でもされているのだと思います。すみません、全く余談でした。

すみません、一つ佐藤先生に。佐藤先生のお話は全て非常にクリアに伺っていて、分かりやすかったですけれど、一つだけ私が聞き落とししたのかもしれないので確認します。何度かキーワードで出てきている「システムティックな共存」というチームですけれども、分かれるようで、若干、今一つ、まだ完全に腑に落ちていない部分があります。面白い例を出されていたのは、京都に住んでいる人が、いわゆる京都、ザ伝統文化のような感じではなくて、昔からの伝統的なお茶の器を作っているけれど、アングラのクラブシーンに非常にコミットしていて、食事のときは中華料理をたくさん食べるというように、人というのはすごく面白と思います。それは、システムティックな共存という感じで言っているのでしょうか。

言葉の例は非常に分かるのです。例えばカナダのマイノリティの人が、フランス語とイタリア語と英語とスペイン語で、言語というのは *syntagma* がある一つのシステムなので、それを踏まえていないと、バイリンガル、ポリリンガルはできないので、システムティックに一個人の中で共存していると分かるのです。けれども、京都の、先ほどのいささか戯画的に言った人の例では、イメージとしては、もう少し *syntagmatic* というよりは、*paradigmatic* といえますか。今はアマゾンで、世界中からいろいろなものを何でも買えて、それはシステムティックな統合とっていいのかどうかなど、私が、その概念の捉え方を分かっていないのかもしれませんが、その言葉の解説をさせていただければという、それだけです。

(佐藤) 先ほどの金沢君の質問に対しての答えで、いろいろな文化要素に触れたり、それを取り込むことによって、病気にもなれば、すごく楽しくもなるというような状態がベースだと言いました。それがうまく行っているときには、歯車が少しくずつかみ合って、幸福に生きていける状態というのがある得ると思うのです。それは、言ってみればある種の人類学者にとつての統合された人格像、つまり幾つかの社会のそれぞれに適応しているというか、ダブルな環境を生きているというか、そういう生を実践している、そのような状態をシステムティックな共存と言ったのです。しかし、それが実践的に成立しないケースも多々あるという意味では、共存し得ない場合もたくさんあると思っています。

(床呂) ありがとうございます。それから、これが最後のコメントですけれど、トランスカルチャーのディスカッションをする前の、私の個人的なイメージでは、例えばグローバル化の話をお聞きしましたけれど、文化や情報が国境や地域を越えて空間的な移動のメタファーというかイメージが非常に強かったです。もちろん、それも大事な側面ではあると思うのですけれど、今日、佐藤先生や皆さんのお話を聞いていくと、特に身体感覚のワイドニングとか変容というような話がありました。文化の中にあつて、あるいは個人の感覚でもいいの

ですけれど、変容していくモーメント。トランスというのは移動、超越する、超えていくというニュアンスもあると思うのですけれど、後者のニュアンスに関わるような、多分、肉の世界の話も、恐らくそういうテーマに関わってくるのだと思うのですけれども、その二つの側面ということでお話しいただいて、今回、非常に良かったと思っております。

それでは、徐々に時間ですが、吉田さん、よろしいですか。

(吉田ゆか子) 佐藤先生の話とつなげて個人的に考えたことですが、私はバリの研究をしていて、バリの島の音楽と踊りをやっているのですけれど、顔の表情が割とバリ人っぽくなってきたと言われ、自分でもそう思いますし、その部分では早く適応できたのですけれど、音の取り方や、バリ人っぽく踊る、バリ人っぽく音をとる、というのは、すごく難しいです。一生懸命まねして、そういうふうになりたいのですけれど、なれなくて、もう十年ぐらい練習しています。

バリ料理を食べるなどはすごく簡単にできるといえるか、トランスカルチャーな状況で、他の文化を、すごく表層的なレベルで、あるいはすごく簡単に、取り込めることもあるのですが、一方で、それを追い求めて、何度も何度も練習して、やっと少しつかめるような感覚もあって、そういう密度の違い、層の違いのようなことも考えたいと思いました。

(佐藤) それで思い出したのは、先ほど紹介した松嶋さんの『プシコ・ナウティカ』という本の中に、精神障害を持った人たちがやる演劇の話があります。その演劇のメソッドというのは、何かの型にはめるのではなく、型を外していくような訓練を最初にします。例えば、ものすごくゆっくり歩くということを延々とやる。それは一種、もともとある身体の型を何ものでもないものへ下ろしていくような訓練だと思っております。そこから考えると、日本的な体の型から、バリの型の型にまっすぐ行くのではなくて、いったんほぐして行くようなものがあったら、うまくいくのではないかと、今の話を聞いていて思いました。

(吉田ゆか子) 指導者によって、そういう戦略を取る人もいて、バリ舞踊とは関係ないけれども、いつも使わない筋肉を使うとか、まず体操のようなことをやってから、バリ舞踊の型に入る人もいますし、バリ人と同じように、バリ人も模倣で学ぶので、日本人もそのやり方で学ぶ。学び方さえまねするような人と、両方のメソッドがあります。多分、今おっしゃっているのは、まずいろいろな動きを試みる人のタイプだと思います。

(佐藤) そうですね。実際、先ほど紹介したダムタイプの作品の振りつけを、全然見たことのない現代の学生に、当時パフォーマーだった人が教えてみるというのをやったのですが、そのとき最初にやっていたのも、ストレッチでした。とにかく、いったん体を思い切り柔らかくして、ほぐして、そこから始める。ある体の型に入るときに、その手前で短期間でも長期間でも、いったん型を外していくようなというのが、私の中では離己的な世界に近づく方法の一つだろうと妄想しています。

(吉田ゆか子) でも、外れた状況というのは、普遍的に想定できないではありませんか。だから、バリの人にとっての外れた状態と、日本人にとっての外れた状態というのは、同じだと想定するのは難しいと思います。体操するタイプの先生というのは、西洋的ないろいろなメソッドに触れていて、そちらの外れている状況を想定して、日本人の体をそういうふうを外すわけです。

(佐藤) 出発点が違うと外し方も微妙に違うということですよ。

(吉田ゆか子) そうですね。

(河野) 少しいいですか。バリのダンスに近づくことがいいのかというのがあるのです。私がかナダで出会ったインド人の剣道家が、ちよつと考えられない動きをします。彼はインド人で、かつてのクシャトリア階級で、トンファーみたいなインド古来の武術をやつてから剣道に来ているので、今までにないような動きをされて、それは非常に倒しにくかったの

です。従って、少し違う方がいいことがあって、踊りに関しても、もしかしたら違うテイストがあった方が面白いのかもしれないと思うのです。

(吉田ゆか子) バリ人と一緒にしても、どうせできないから違うものをやろうとする人もいますし、やはりバリ人のようにやりたいと言って、なるべくバリらしくやる人もいます。特に日本人は後者の傾向が強くて、アメリカ人は割とアレンジしたり、バリ人と調和するけれども、でも同じことはやらない、というような方向に行ったりして、そこも文化差があったりします。

(床呂) はい、ありがとうございます。顔／身体学が非常に面白いのは、今の吉田さんなら、例えばご自身もバリ舞踊をされたり、河野先生なら剣道をされたり、それぞれ身体技法を、それこそ参与観察ではないですが、自分でも実践されながら身体感覚の変容などの経験を、自分の身体経験に基づきながら語るような研究スタイルもあって、これも非常に面白いと思いつながら聞きました。

まだまだ議論はありそうなのですが、予定の時間を若干経過しておりますので、そろそろ今日のシンポジウムはおしまいとさせていただきます。閉会の前に、代表の山口先生の方から一言、締めのご挨拶のお言葉を頂ければと思います。

山口先生、よろしいでしょうか。

(山口) ありがとうございます。うまく締められたらいいのですけれど。今日はトランスカルチャーという領域の宿題的な話をこちらからは丸投げしてお話ししていただいた感じでしたが、すごくまとまりが付き、そして何となく腑に落ちたところがあり、ありがとうございます。

元々、この「顔・身体学領域」の前身というか、この領域以前に、「顔認知領域」という複合領域で、医学系、脳科学系で顔の研究をしていた領域がありました。私は元々、文化人

類学や哲学にも興味を持っていたこともあり、また文化差や個人差を考える上で、やはり生身の身体を扱ってみたいという気持ちもわいてきました。私自身もヨガ・瞑想をしておりますので、生身の身体にすごく興味がありました。

特に、今日話を聞いて良かったなと思ったのは、「顔・身体領域」を提案する中で、トランスカルチャーという言葉を使ったけれども、本領域で文化・制度的なものをあまり追求していないことについて審査員から指摘されました。とはいえ、この「顔・身体学」領域は何となく共通的な土壌として、個への関心がある。個人の関心がすごく強い研究者たちが多いのではないかと思います。今日お話しされていた中に、こうした個の視点が多様性の許容になり、さらには個に関心を持つことが、文化や制度を越える力となるのではないかと思いました。そこを、強めていきたいと思っていたのですけれど、今日、それとは違うクライシスもあるのです。

多様性があるということは、そこに自分が持ってきたものを全部失っていく、そういう怖さがあるものだということです。ひよっとすると先に金沢先生も、私が女性の代表だからと言っていたようにですけど、研究者社会でマイノリティである女性というのは、こうしたクライシスに強いのかもしれないと思いました。

何か新しいものに向かって、多様性を許容しながら文化を超えていったり、個人に関心を持つていくところなど、前向きに越境していけるポジティブシンキングなところが女性にはあるのだろうと思います。そういうポジティブシンキングで、研究分野の壁を越え、多様な分野の中で融合しながら、前向きにポジティブに新しいものを生み出して、飛び出していけるものがあるのではないかと考えさせていただきました。また引き続き床呂先生、河野先生、先生方、どうぞよろしく願います。この領域を、さらに展開できるように頑張つていきたいと思しますので、どうぞ、よろしく願います。今日は、どうもありがとうございます。

うございました。

最後に、お休みの中、お集まりいただきましてありがとうございます。お忘れ物のないように。どうもありがとうございます。

(床呂) ありがとうございます。

顔・身体学とは

「顔・身体学」領域では、顔と身体表現の意識化されない点を意識化することにより、文化の中で閉じたコミュニケーションを理解し、異文化が相互に行き交うトランスカルチャー状況下における他者の受容を導くことを目標とする。顔や身体は目前に物理的に存在する対象であるため、多様な分野の共通の研究対象となりうる。現実の顔や身体表現とその認識様式を実証的に検討し、文化的多様性とその背景要因を調査する。そこからメカニズムの解明や社会組織上の再考が可能となり、顔と身体表現から時代や社会を考察することもできる。人文社会を中心としたアプローチにより、トランスカルチャー状況下における顔身体学を考えていきたい。

トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築（第三回）
科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」

『トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築―多文化をつなぐ顔と身体表現』

二〇一八年度 公開シンポジウム

共催 AA研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探究
―人類学におけるミクロマクロ系の連関2―

編 集…床呂郁哉

編集補佐…吉田優貴

発行…東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

〒一八三―八五三四 東京都府中市朝日町三―一―一

TEL 〇四二―三三〇―五六〇〇

FAX 〇四二―三三〇―五六一〇

ホームページ <http://kao-shintai.jp/index.html>

発行…二〇一九年七月一九日

表紙デザイン…石黒美美代

印刷・製本…株式会社ワードオン

〒三三五―〇〇〇四 埼玉県蕨市中央七―五六―三

ISBN 978-4-86337-302-0



東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所